

仙台市文化財調査報告書第35集

# 南小泉遺跡

都市計画街路建設工事関係第1次調査報告



昭和57年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第35集

# 南小泉遺跡

都市計画街路建設工事関係第1次調査報告



昭和57年3月

仙台市教育委員会

## 序 文

南小泉遺跡は全国的に著名な遺跡であります。今まで正式な発掘調査がなされたことがありませんでした。強いて言えば、昭和53年度に国庫補助事業として行なわれた南小泉遺跡範囲確認調査をあげることができるでしょう。この時の分布調査で、今回発掘調査を実施した古城三丁目地区は遺物の散布度合の高い地区でありました。

さて、今回の調査のきっかけとなったのは、仙台市の内環状線となる川内・南小泉線という都市計画街路の工事が目前にせまっていることにあり、また、この都市計画街路は、仙台市の地下鉄工事による国道4号線の渋滞を緩和する迂回路としての役目もあって、道路建設にも拍車がかかっていたためです。

今回の調査で、南小泉遺跡の実態の一端が解明されたと思いますが、この都市計画街路の調査は来年度以降も引き続き行なわれる予定でありますし、今後も調査の機会があるだろうと思われ、しだいに遺跡の全容が具体的な形となって皆様に提示されることと思います。

この冊子が皆様の考古学研究の一資料となれば幸いであります。皆様のご批評、ご教示をお願いする次第であります。

昭 和 57 年 3 月

仙台市教育委員会

教育長 藤 井 黎

## 例　　言

1. 本書は都市計画街路、川内南小泉線建設工事に先行する発掘調査報告書である。
2. 内容は事実報告に主力をおき、考察は若干である。次年度に第2次調査を予定しており、そのおりに2ヶ年の資料に基づき、分類、考察したい。
3. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1:25,000仙台東南部地形図である。
4. 土層、遺物の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財團法人・日本色彩研究所色票監修の新版標準土色帖を使用した。
5. 報告書作成にいたる作業分担は次のとおりである。

遺物実測	結城慎一、渡辺忠彦、松本寿一、只野宗一、小沢勝久
遺物探拓	結城慎一、渡辺忠彦
遺構、遺物トレース	結城慎一
原稿執筆	結城慎一
編　　集	結城慎一、渡辺忠彦

6. 遺物の取扱いは次のとおり行なった。
  - 1) 表採はⅡ区、Ⅲ区と大別して取上げ、「表採」とネーミングした。
  - 2) 耕作土、天地がえし層はⅡ区、Ⅲ区と大別して取上げ、「1層」とネーミングした。
  - 3) 検出面は、本来遺構と結びつくものであろうが、天地がえしが地山面まで達し、発見遺物が移動している可能性が大なので、大、小地区名のほかに「2層」として取上げてネーミングした。
  - 4) 遺構中より出土したものについては、遺構名及び埋土何層から出土したかを明記して取上げ、そのようにネーミングした。
7. 遺物トレース（土器トレース）において、その中心線が一点鎖線となっているものは、図上復元したものを表わす。
8. 内黒土鉢器の実測図には、スクリーントンを貼って内黒を示した。
9. 遺物写真は、第2次調査報告に一括して掲載する予定である。
10. 磁北方向は真北に対して西偏7°0'である。

## 本文目次

調査要項	1
1. 調査までの経過	1
2. 南小泉遺跡の概要	2
3. 地区設定と調査箇所	5
4. 調査経過	6
(1) 第1次調査区	6
(2) 第2次調査区	6
5. 基本層位と遺構検出状況	7
6. 発見遺構とその遺物	8
(1) 積穴住居跡	8
(2) 焼土遺構	45
(3) 土壌	45
(4) 溝	49
(5) III-2f区土壤状遺構	56
7. まとめと考察	59
(1) 古墳時代の遺構について	59
(2) 平安時代の遺構について	60
(3) 古墳時代の須恵器について	65
(4) 土師器について	66
(5) Pit127 出土の中国鏡について	66
(6) 南小泉遺跡の歴史的復元	77
引用・参考文献	82

## 図・表・写真目次

図1 南小泉遺跡とその周辺	3	図9 第3号住居跡出土遺物実測図(1)	16
図2 発掘調査区とその周辺	4	図10 第3号住居跡出土遺物実測図(2)	17
図3 グリット配置図	5	図11 第5号住居跡	18
図4 基本層位模式図	8	図12 第5号住居跡出土遺物実測図	18
図5 第1号住居跡	9	図13 第7号住居跡	19
図6 第1号住居跡出土遺物実測図	10	図14 第7号住居跡出土遺物実測図	20
図7 第3号住居跡	12	図15 第16号住居跡	22
図8 第1次調査区遺構配置図	13, 14	図16 第16号住居跡出土遺物実測図	23

図17 第4号住居跡	24	図61 弥生土器片撮影	80
図18 第4号住居跡出土遺物実測図(1)	26	図62 須恵器甕片撮影(1)	81
図19 第4号住居跡出土遺物実測図(2)	27	図63 須恵器甕片撮影(2)	82
図20 第4号住居跡出土遺物実測図(3)	28		
図21 第6号住居跡	29	写真1 発掘前の状況	6
図22 第6号住居跡出土遺物実測図	31	写真2 現地説明会の様子	7
図23 第8号住居跡	31	写真3 第1号住居跡と第14号住居跡	10
図24 第2次調査区構造配置図	33, 34	写真4 第1号住居跡出土状況	10
図25 第9号住居跡	35	写真5 第3号住居跡遺物出土状況	15
図26 第9号住居跡出土遺物実測図	36	写真6 第3号住居跡	15
図27 第10号住居跡	37	写真7 第5号住居跡	19
図28 第11・15号住居跡	38	写真8 第7号住居跡	20
図29 第11・14号住居跡出土遺物実測図	39	写真9 第16号住居跡	21
図30 第12号住居跡	40	写真10 第4号住居跡	25
図31 第11・12・13・14号住居跡出土遺物 実測図	41	写真11 第4号住居跡出土状況	25
		写真12 第6号住居跡	30
図32 第13号住居跡	42	写真13 第8号住居跡	32
図33 第14号住居跡	43	写真14 第9号住居跡	32
図34 焼土追構	45	写真15 第9号住居跡土壌内遺物出土状況	32
図35 土壌出土遺物実測図	47	写真16 第10号住居跡	37
図36 第3号土壤	48	写真17 第12号住居跡	40
図37 第5号土壤断面図	49	写真18 第13号住居跡	41
図38 第1号溝断面図	53	写真19 第14号住居跡	44
図39 第2号溝断面図	53	写真20 第11・15号住居跡	44
図40 第3号溝断面図	53	写真21 焼土追構	46
図41 第5号溝断面図	54	写真22 第1号土壤、第15号溝	46
図42 第5・6号溝断面図	54	写真23 第3号土壤	46
図43 第7号溝断面図	54	写真24 第5号土壤	48
図44 第9号溝断面図	55	写真25 第1次調査区溝掘上げ状況	49
図45 第10・11・13号溝断面図	55	写真26 第2次調査区溝掘上げ状況	50
図46 第15号溝断面図	56	写真27 第1号溝断面	50
図47 溝出土遺物実測図(1)	56	写真28 第4号溝	50
図48 溝出土遺物実測図(2)	57	写真29 第5号溝断面	51
図49 溝出土遺物実測図(3)	58	写真30 第5・6号溝合意状況	51
図50 Ⅲ-2 t区断面図	59	写真31 第6号溝	51
図51 古墳時代土師器坏	61	写真32 第7号溝断面	52
図52 古墳時代土師器台・高坏	62	写真33 第9号溝	52
図53 古墳時代土師器壺・瓶	63	写真34 第15号溝断面	52
図54 古墳時代須恵器	64	写真35 Pit群掘上げ状況	67
図55 第1次調査区ピット群	68	写真36 Pit 127の状況	67
図56 古錢拓影(1)	74		
図57 古錢拓影(2)	75	表1 ピット群記録表	68
図58 古錢拓影(3)	76	表2 中近世陶磁器の出土状況	73
図59 その他の遺物(1)実測図	78	表3 中国古錢記録表	76
図60 その他の遺物(2)実測図	79		

## 調査要項

- 調査目的 都市計画街路建設工事に伴う事前調査
- 調査対象面積 約4,500m<sup>2</sup>
- 調査面積 約1,500m<sup>2</sup>（仙台市古城二丁目地内）
- 調査期間 現地調査 昭和56年4月13日～9月3日（実働87日）  
室内整理 昭和56年9月4日～9月9日、12月14日～昭和57年1月30日  
(実働44日)
- 調査体制
- 調査主体 仙台市教育委員会
- 調査担当 仙台市教育局社会教育課文化財調査係（結城慎一、渡辺忠彦）
- 調査指導 仙台市文化財保護委員・東北学院大学教授（伊東信雄）
- 調査参加者 松本寿一、只野宗一、小沢勝久、千葉博美、甲田恵子、芦野ヒデ子、菅野三郎、吉田俊一、村上まつえ、佐々木由紀、佐藤和子、蓑子みよ子、斎藤啓子、黒滝ふくえ、高平智恵子、渡辺浩一、板橋うめよ、佐藤慶一
- 調査協力 仙台市建設局道路部建設課、仙台市市長室相談課、地元町内会

### 1. 調査までの経過

都市計画街路・川内南小泉線は仙台市の内環状線となるものであるが、これが古式土師器の標式遺跡などとして著名である南小泉遺跡範囲の南辺を横切ることになり、市の道路部及び財政課と協議を行なった結果、道路部の協力を得て、調査にかかる経費は教育費の一般財源から支出することにして、事前調査を実施することになった。

調査までの経過は、まず、道路部から文化財保護法第57条の3により提出された発掘通知を教育局社会教育課文化財調査係で受理し、宮城県教育庁文化財保護課を通じて文化庁長官へ進達した。これに対して文化庁長官名で市長あてに事前調査の通知が来た。

2月の係会議で調査担当が決定されると、調査そのものの計画策定にはいった。計画の内容は、経費の算出、重機、仮設事務所使用の見積りをとり、また現地踏査し、境界杭、基準杭の確認、グリット配置等の計画図面の作成、作業員、補助員の手配などである。作業員のほとんどは地元の人々で構成され、その手配には、市の相談課及び地元町内会の協力をもとめた。これらの調査計画の起案、決裁が済んだところで、仮設事務所の建設、バックホーによる表土排除、調査前の現状写真撮影をした。同時に法第98条の2による発掘調査届を県を経由して文化

府長官あて提出するとともに、関係町内会への広報を町内会回覧方式で行なった。

以上のような協議、手続きを経て、4月13日から発掘調査に着手することになった。

## 2. 南小泉遺跡の概要

仙台市は段丘及び沖積平野からなっていると概観でき、当遺跡は沖積平野奥部上に存在している。沖積平野は、深沼層、霞ノ目層、福田町層、岩切層の4層からなっているが、南小泉一帯は霞ノ目層に当たる。この層は現世につづく氾濫源で、内陸部の最上部を占めている。また、この層は土器、石器、古代の植物種子を含む偽層砂岩、ローム層からなっている。

南小泉遺跡は、現在の仙台市遠見塚一丁目、二丁目、南小泉二丁目、古城三丁目、南小泉字伊藤屋敷、字遠見塚西、字村東、字霞ノ目を含む広範囲にわたり、弥生時代から古墳時代を主要要素とする集落跡である。

昭和14年に、この地に霞ノ目飛行場（仙台飛行場）が建設された。この飛行場は戦中の昭和14～16年に拡張工事が実施され、その際、多くの遺物や竪穴住居跡などが発見され、学界から注目されるようになった。これより前、耕作等により弥生土器片、土師器片が出土し、採集されることが松本源吉氏により注目されていた。現在、この飛行場は陸上自衛隊東北方面航空隊で使用している。

当地も仙台バイパスが開通する昭和43年ごろから市街化が進み、現在、農地として残っているところは少なくなってきた。

この付近は遺跡の多いところで、まず、南小泉遺跡の中心部には、国指定史跡である遠見塚古墳がある。これより西方には法領塚古墳、猫塚古墳があり、かっては大小の古墳群を形成していたと思われる。またこの地には一部条里遺構が残っており、「二の坪」、「三の坪」の地名も残っている。この地の北側には、陸奥国分寺、尼寺跡がある。

昭和52年度に行なった分布調査では、古城三丁目に土器散布の密度が高く、今回の調査対象地区と重なっている。またこの年行なった発掘調査により、畑の天地がえしが深く、遺構面のほとんどを掘りおこしていることがわかった<sup>(1)</sup>。遺構面は現地表下20～30cm位であるので、畑地における天地がえしが深いと、遺構の残存があやぶまれるところである。しかしながら、昭和54年2月に、バイパス沿いで試掘調査を実施したところ、平安時代の住居跡1棟が「田床」下面から発見されている<sup>(2)</sup>。この箇所は、今回調査地の、すぐ東隣りである。

(1) 仙台市文化財調査報告書第13集「南小泉遺跡一範囲確認調査報告書」昭和53年3月

(2) 仙台市文化財調査報告書第28集「平報2」昭和56年3月 P9～P14



図1 南小泉遺跡とその周辺



図2 発掘調査区とその周辺

### 3. 地区設定と調査箇所

今回の調査対象となった都市計画街路・川内南小泉線は、遠見塚二丁目から古城三丁目のバスまでの部分である。

この部分の計画街路中心線に、100mごとにNo.0、No.5、No.10、No.15、No.20、No.25のコンクリート杭が打ってあり、また、この中を20mごとに分割し、木杭が打たれていたので、これをを利用して地区の設定を行なうこととした。また、当初計画では、単年度の発掘調査で終了するのではなく、恐らく2ヶ年に亘る調査になるだろうと予想されたため、対象街路全体にメッシュをかけることにした。

まず路線長に沿って、No.0～No.5をⅠ区、No.5～No.10をⅡ区、No.10～No.15をⅢ区、No.15～No.20をⅣ区、No.20～No.25をⅤ区とした。そして、その中をそれぞれ10mごと区切り、1～10の小区を設定した。次に路線幅については、計画街路幅員が歩道を含めて36mであるので、中心線を基準として5mずつ区切り、それぞれa、b、c、d、e、f、g、hとした。これによって出来る各個のグリッドの呼称は、Ⅲ-2 c区、Ⅱ-4 d区などとなり、一つのグリッドは $5 \times 10 = 50 (\text{m}^2)$ の範囲である。

そこで、これらの図面計画に基づき、今年度調査できた箇所は、用地買収との関連もあり、Ⅱ-3～6のc～f区、Ⅱ-10のc～f区の一部、Ⅲ-1～3のc～f区である。この部分は対象区の中でも広い畠地となっていたところであり、住宅等の建築物がなかったところで、天地がえしなどの耕作が深くなければ、最も遺構の残存状況も良く、その立地条件から調査も仕易いと考えられた。また、今後、次年度の調査に関して、畠地での保存状態、残存した場合の深さ、遺構の密度が知られ、その検討資料としては充分のものを得られる区域であると考えられた。

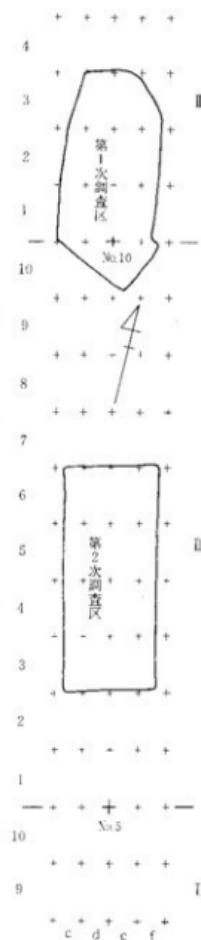


図3 グリッド配置図

## 4. 調査経過

### (1) 第1次調査区 (II-10、III-1~3区)

4月13日から開始する。まず、バックホーで耕作土及び天地がえしによる擾乱層を排土してもらい、スコップ、ショレン等で、まず荒削りを実施する。ほぼ平らになるまで荒削りをくりかえし行なう。

荒削り終了後、遺構検出のための削りを行なったが、この時点でエタプロン杭を打ち、 $5 \times 10m$  のグリットを設定する。この初期段階の遺構検出で確認されたのは、第1号溝、第2号溝、第1号土壠、第2号土壠(後に第15号溝とした)、第3号土壠、第1号住居跡及び多数のピットである。また調査区東側と北側に大きく擾乱があることも確認された。

その後、全体写真、部分写真撮影、溝の掘り上げ、土壠の掘り上げ、平面図、断面図作成をくりかえし行なう。最後に堅穴住居跡の掘り上げを実施した。

この第1次調査区からは、第1号～8号、15号溝、第1号、3号土壠、第1号～7号、14号、16号住居跡、ピット多数が発見されている。

写真1 ▶  
発掘前の状況  
(S→N)



### (2) 第2次調査区 (II-3~6区)

5月25日、26日の2日間、バックホーによる表土排除で調査がスタートした。地山までは30～50cmと浅く、第1次調査区のそれとは若干異なる。25日、26日にバックホーで排土はしたが、まだ第1次調査区の住居跡を除く部分の調査が完全でなかったので、28日の午後から本格的に荒削り作業にかかった。

荒削りを完了し、遺構検出できたのは、最終的には6月2日の午後である。遺構検出までに

時間がかかったのは、第2次調査区全体に天地がえしの痕跡が、場所によっては深く残っていたので、それらの擾乱を遺構ラインの確認ができるまで耕土しなければならなかったからである。この時、検出された遺構の数は、竪穴住居跡5棟、溝3条、土壙1基などである。

この検出状況を略図に作り、写真を撮ってから、第9号溝、第4号土壙（後に第13号住居跡と改称した）から掘り下げ始めた。

最終的に発見された遺構は、竪穴住居跡7棟、溝6条、土壙1基、ピット多數である。

竪穴住居跡の掘り下げは第1、第2次調査区とも並行して行なった。しかしながら切り合い関係の多い第1次調査区の方が、その掘り上げに時間を要する結果となった。

ところで、調査現場の状況がほぼ把えられるようになった8月1日、午後2時から、現地において市民を対象として、遺構、遺物を公開する現地説明会を実施した。これに先立ち、7月29日、午前10時30分から報道機関に広報の意味も込めて発表した結果、真夏の炎天下ながら約100名の市民が参集した。

このような経過をもって、9月3日、重機による埋め戻しも終了し、現地調査を終えたのである。その後9月4日～9月9日、12月14日～昭和57年1月30日まで、遺物整理及び図面整理を行なった。ただし、この作業は現地調査中も雨天時を利用して実施していたことを付け加えておきたい。

写真2  
現地説明会の様子



## 5. 基本層位と遺構検出状況

遺構検出面までの層位は1層であり、内容は耕作土及び天地がえしによる擾乱土である。天地がえし等の擾乱は大きく2段階に分れており、この差は10～20cmである。ただし例外的に

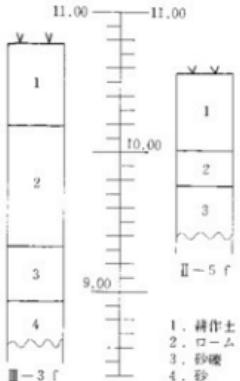


図4 基本層位模式図

ところで、よって天地がえしの痕跡が、全面に程度差はあるが歓状に見られ、これによって、住居跡などの古代遺構が細かく切られているところである。

調査区の地山の上面は、ほとんどが2次堆積ローム層であり、ところによっては砂質シルト、砂が地山上層を形成している。基本層位図を見てわかるように、第1次調査区III-3 f 区では耕作土上面が10.775、地山上面が10.190、第2次調査区II-5 f 区では耕作土上面が10.565、地山上面が10.010m の標高である。地山上面で比較するならば、南方に若干傾斜しているがほぼ平坦と言つてよい状況である。しかしながら、地山の第2層を形成する砂礫層のレベル差は80cm強と北側に深くなつており、その分だけ地山第1層であるローム層の堆積が厚い。

以上の状況から判断されることは、古代において地山の凹凸が、開墾、天地がえしなどの耕作行為によって、ほぼ一定の地山レベルに標準化され、現在のほぼ平坦な表面を形成していったということであり、それがために、古代において開地にあった遺構は保存が良好で、反対に凸地にあった遺構は削平されて、消滅したか、保存状況が悪く残存するかという状況を呈していると思われる。

## 6. 発見遺構とその遺物

### (1) 積穴住居跡

第1次調査区、第2次調査区をとおして、第1号～第16号までの番号を付す住居跡が発見された。このうち、第2号住居跡とはじめの段階で称していたものについては、調査の進行にともない住居跡でないことが判明したので、後段で焼土遺構として説明を加えることにした。

なお、各住居跡の記述にあたり、古墳時代の住居跡から平安時代の住居跡へと説明を進める  
こととするので、住居跡番号にそった記載ができないところもある。

### 1) 第1号住居跡（図5、写真3）

第1次調査区III-1 c、d区に位置し、第14号住居跡と第1号溝に切られ、第16号住居跡を  
切っている。遺構の増改築は認められない。

（平面形・方向） 約7.4m×(5.5+α)mの隅丸長方形のプランを呈している。長軸方向は磁北  
に対してN40°Eに傾いている。カマドの施設はなく、中央部に40×50cmの範囲に薄く焼土の分  
布が見られが存在が考えられる。住居跡周縁に幅約50cmの溝がめぐっている。

（堆積土） 削平がはげしく、周溝で約10cm、床面で約7cmの暗褐色粘質シルトが堆積してい  
るだけである。

（床面） 貼床ではなく、褐色ロームの地山が生活面となっている。周溝、炉があるほかは、柱  
穴ははっきりわからない。図面上にピット番号を付しているものは、中世以降のものである。  
遺物は、須恵器壺、滑石製小玉のほか、高坏の小破片もあるが、さほど多くない。

（出土遺物）（図6） 須恵器壺、滑石製小玉、滑石製剣形石製模造品、土師器の高坏の小破  
片が出土しているが、量は少ない。壺は、床面に半分埋まるように出土し、小玉は、周溝部よ



図5 第1号住居跡



写真3  
第1号住居跡と  
第14号住居跡  
(S→N)



写真4  
第1号住居跡  
出土状況

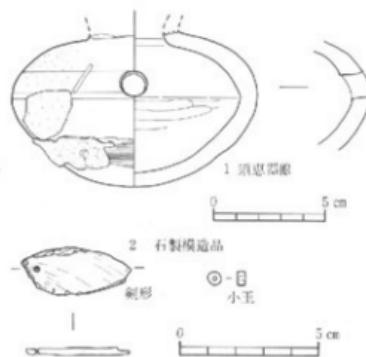


図6  
第1号住居跡出土遺物実測図

り出土している。

體 口縁部が欠損しており、体部高7cmである。体部中央に11cmの最大径をもつ算盤玉状の体部形を呈し、その最大径となる部分より若干上位に円孔が貫通している。体部には沈線、波文などの施文はない。

調整痕はあまりはっきりしないが、ロクロで調整されており、体部外面下端から底部にかけては手持ちヘラ削りされている。しかも、それも丁寧に、ほぼすり消されている。体部下端から底部にかけての一部に焼成痕が付着している。また、体部内面中央部には、横位のヘラナデ痕が見られる。

色調は、体部上半が灰をかぶって灰白色と黒色の斑を呈し、下半が黒、底部が灰色を呈している。

石製模造品 剣形と小玉、各1点出土した。ともに滑石製である。剣形は長さ3.9cm、幅1.7cm、厚さ0.25cmを計る。小玉は径0.5cm、厚さ0.3cmである。剣形の小孔は両面穿孔、小玉は片面穿孔である。

## 2) 第3号住居跡（図7、写真6）

第1次調査区III-1e、f区で検出された。これも第1号住居跡同様に、天地がえしなどの削平がだいぶなされている。また第3溝によって北壁が切られている。遺構の増改築は見られない。

（平面形・方向） 約(5m+a)×5mの方形プランをもつ。西壁で方向を計れば、磁北に対してN20°Eとなる。カマドの施設はなく、炉もはっきりわからない。南、東壁沿いに土壌が施設されており、平面形と角度が異なるが、深さ40cm～80cmの柱穴が4穴、相互距離約3mで配置してある。

（堆積土） 検出した時点から、焼土、炭、灰が非常に多く、堆積土層もきれいな層に分れない。褐色、黒褐色の焼土、炭、灰が混入したシルトが複雑に堆積している。

（床面） 厚さ約2cmの黄褐色粘土の貼床がある。この貼床は、住居跡内土壌及び北壁を切っている第3号溝付近では非常に薄くなるか、認められなくなっている。堆積土中、土壌中及び床面まで窯環を主とする遺物が多量に見られる。

（出土遺物）（図9・10）住居跡中では、出土遺物がもっとも多い。土師器の窯環破片が9割で、その他は、土師器壺、壺、砥石である。須恵器は発見されなかった。

窯環 接合資料も含めて、壺部から脚部の1個体となるものがなく、全て、壺部及び脚部の破片となっている。また、壺部片より脚部片の方が圧倒的に多い。どちらも磨耗が著しいものが多い。朱塗りのものが多い。

壺部はその下半に隆起がめぐらしくなく、壺部と脚部の接点から口縁部にかけて緩やかに

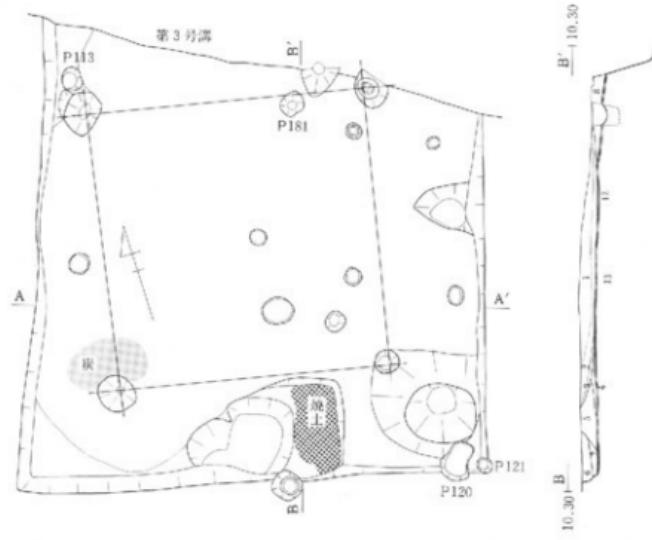
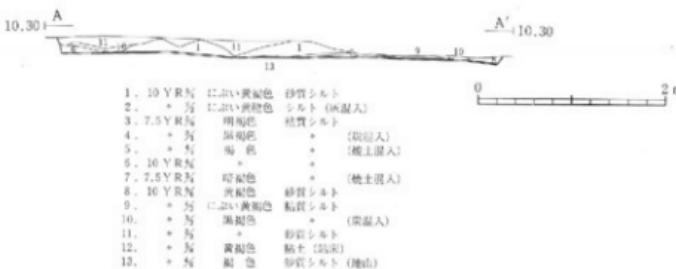


図7 第3号住居跡



内弯しながら立ち上がるものと(図9-1)、坏部下半に稜がめぐり、そこから口縁部にかけて、やや外反しながら立ち上がるものの(図9-2、6)がある。調整観察は困難なものが多いが、縦位放射状にヘラミガキされているようである。

脚部は、その基部において急に広がる形体のものである。そのうち筒部が①内側に若干反るもの(図9-3)と、②外側にふくらむもの(図9-4、7、9)、③ほぼ垂直のもの(図9-5、8)がある。ほとんどが②の形体をしており、②、③の形体のものは、坏部接点部の方へしづり込んで製作されており、①は巻き上げ痕が見られることから、その技法がとられたものである。

脚部調整は、外面においては、ほとんど縦位のヘラミガキであるが、図9-8のものは、筒部ヘラケズリとなっている。筒部内面は、縦位にヘラナデされたあと、その下位は横位にヘラ



図8 第1次調査区遺構配置図

写真5  
第3号住居跡  
遺物出土状況



写真6  
第3号住居跡  
(S→N)



ナデされている。基部内面はハケによる横位のナデ調整痕が見られる。

壺 東壁沿い北側土壌から出土した。丸底風の平底で、外面は橙色、内面は浅黄橙色を呈している。口縁部径14.8cm、底部径3.9cm、器高は6cmである。

底部から内窵しつつも直線的に立ち上がり、口縁部に若干のくびれを形成しながら角度を急にして口唇部へ至る。

体部外面は、口縁部にあっては横位のナデ調整され、体部にあっては横位に細かく手持ちヘラケズリされている。体部内面は放射状にヘラミガキされている。

壺 完形品はない。実測できるもの（図10-1）から判断すれば丸底風の平底で、体部は卵形を呈し、口縁部はやや外反しながら「く」の字状に立ち上がるもので、口唇部で若干段をなす

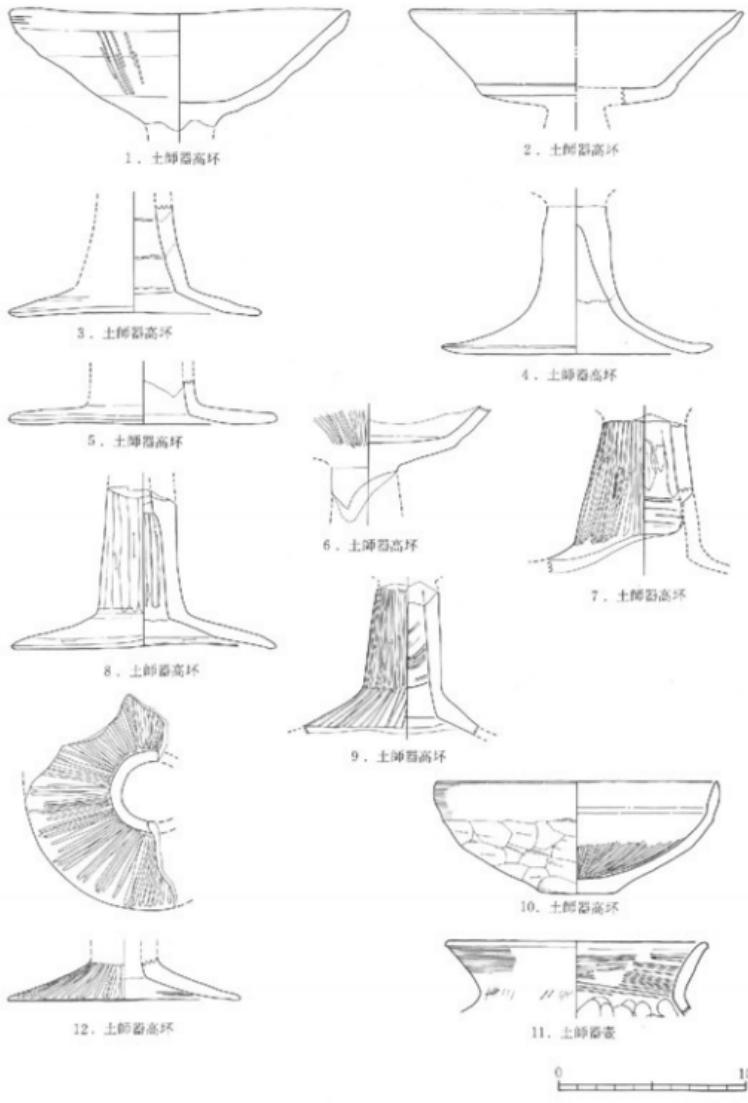


图9 第3号住居跡出土遺物実測図(1)

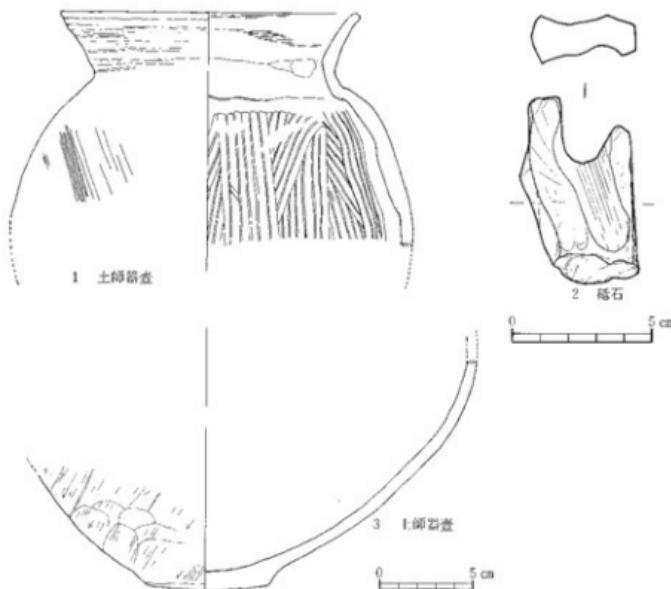


図10 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

ように丸味をおびる。

口縁部は外面横位にヘラナデされている。また体部は、底部付近が縦位にヘラケズリされたあと、縦位にヘラナデされている。底部はヘラケズリされている。

内面は口縁部が横位にナデ調整され、体部が細かく縦位にヘラナデされている。

**砥石** 北西床面から1点出土した。刀子などを磨いたものではなく、溝状に磨りへっているところから、鉄鎌のような尖頭器状のものを磨いたものである。

### 3) 第5号住居跡 (図11、写真7)

第1次調査区II-10c、f区にあり、東半分は調査区外にとび出しており、その全様を知り得ない。第7号住居跡を切っている。

**(平面形・方向)** 平面形は全体を掘り上げることができないため不明であるが、西壁長が3.2mで、南北壁長が1.3mまで計測される。カマドが存在するかどうか不明である。幅約16cmの周溝が施されているが、南壁の方では途絶えてしまっている。西壁の方向はN25°Eである。

**(堆積土)** 検出面からの深さは約14cmで、床面直上には黄褐色砂質シルトが堆積しており、遺物を含んでいる。その上及び周溝には褐色の砂質シルトが堆積している。

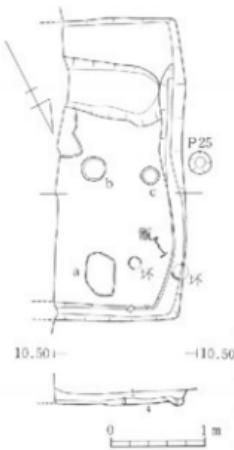


図11 第5号住居跡

ピット a, 10YR 5/4	に近い黄褐色	シルト
b, * 万	暗褐色	*
c, * 万	黒褐色	*
1, 7.5YR 5/4	褐色	砂質シルト
2, *	*	*
3, 10 YR 5/4	黄褐色	(透視含む)
4, *	褐色	粘質ローム(地山)

(床面) 貼床はなく、ロームの地山が生活面となっている。掘り上げ面積は狭く、周溝以外には土壤及び柱穴にあたるものはない。遺物は北西コーナー付近の床面及び周溝から発見されている。

(出土遺物) (図12) 土師器の瓶1点、壺3点が実測可能なものであり、他は、環などの破片が若干だけである。

瓶 破片である。復元推定口径約19cm、残存高8.1cmを計る。口

縁部は複合口縁

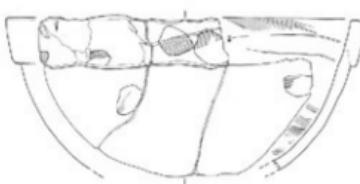
で口縁部幅約  
2.5cm、厚さ0.9  
cmである。体部

は半球形を呈するようである。胎土、焼成とも良好であり、色調は橙色を呈している。

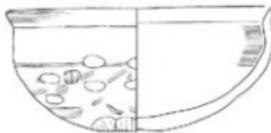
複合口縁部外面には指おさえ痕が残っているが、体部外面の調整は不明である。内面にはヘラナデの調整痕が若干観察される。

壺 3点とも同器形であり、平底風の丸底になつており、底部にあたる部分が丸くくぼんでいる。底部から内寄するカーブを描きながら立ち上がり、口縁部は、はっきり体部と分れるように「く」の字状に短く外側に引き出されている。

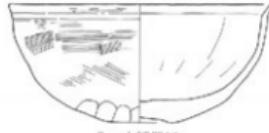
調整痕は外面にヘラケズリが観察されるもの(図12-2、3)と、若干ながらも横位のヘラミガキが認められるもの(図12-4)があり、後者は、内面も放射状ヘラミガキがはっきり認められる。前者と後者では器高は、ほぼ同じであるが、口縁部径は後者が約3cm



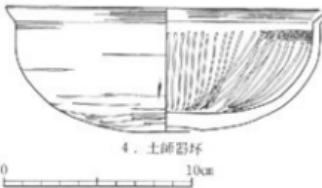
1. 土師瓶瓶



2. 土師器壺



3. 土師器壺



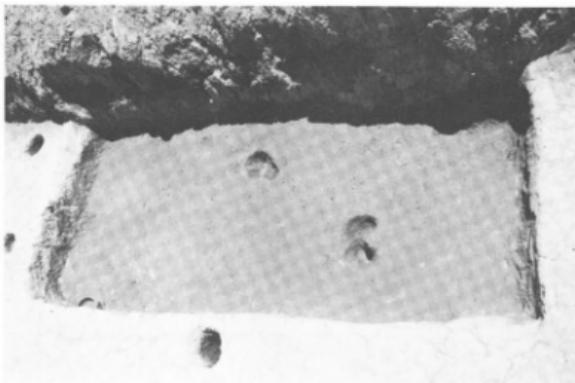
4. 土師器壺

図12 第5号住居跡出土遺物実測図

大きい。

胎土、焼成は3点とも良好で、色調は橙色を呈する。

写真7  
第5号住居跡  
(W→E)



#### 4) 第7号住居跡 (図13、写真8)

第1次調査区Ⅱ区とⅢ区にまたがる1「ポイント」周囲に位置する。第4号住居跡と第5号住居跡に切られており、保存状態は削平がひどく、きわめて悪い。

(平面形) 南北約3m、東西は第4号住居跡に切られて不明であるが、残存長約3mである。北壁ほぼ中央部に焼土、炭が認められるが、カマド状に外側にとび出す施設がなく、深く土壤

状にくぼんでいる。南東角には、浅い土壌が検出されている。東壁で計測すると磁北に対し15°~18°東に偏している。

(堆積土) 床面上は1層であり、褐色粘質シルトである。北壁中央部にある土壌は、上層が焼土を多量に含む暗褐色粘質シルト、中層が炭を含む褐色シルト、下層が褐色の粘質シルトになっている。

(床面) 壁の高さは5cm位残存し、貼床はなく、床面は黄褐色砂質シルトの地山面となっている。南東コーナーは径約0.6m、深さ約0.5mの土壌があるが、柱穴にあたるものは不明である。

遺物は、焼土周辺及び南東角の土壌から発見されている。



図13 第7号住居跡

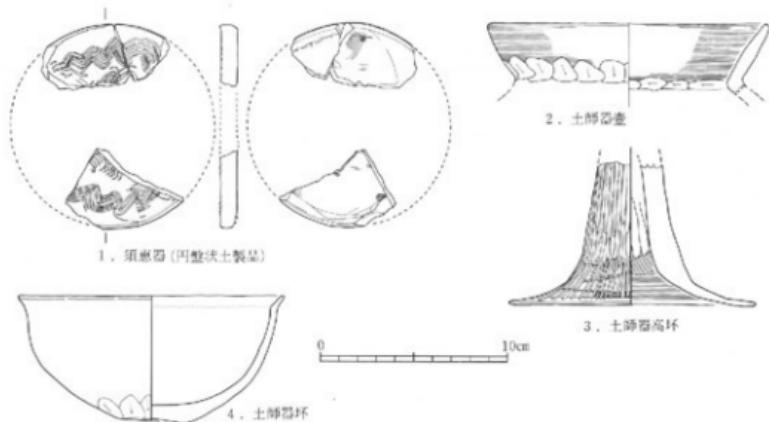


図14 第7号住居跡出土遺物実測図

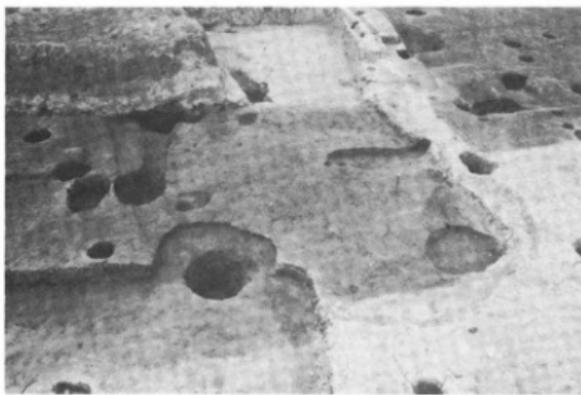


写真8  
第7号住居跡  
(E→W)

(出土遺物) (図14)

壺 胎土には砂粒を若干含み、焼成は普通である。色調はにぼい橙色を呈している。器高は6.8cm、口径14.2cmで、底部は平底風の丸底で、丸いくぼみがある。

断面形をみれば、底部から内寄するカーブを描いて立ち上がり、口縁部は外側に短く引き出されており、特に内面にはっきりとした稜線がめぐるようになる。

調整は、はっきりしないが、口縁部内外面が横位にナデ調整なされており、体部外面最下部に手持ちのヘラケズリ痕が観察される。

壺 口縁部だけのものである。胎土には砂粒を若干含み、焼成は普通のものである。色調は橙

色を呈する。「く」の字状口縁で厚さ約0.7cmである。

口縁部内外面とも横方向にナデ調整され、その後、頸部外面が縦位ヘラケズリ、内面が横位ヘラケズリされている。

高坏 脚部片である。胎土には砂粒を含まず焼成良好であり、色調は浅黄橙色を呈する。基底部径13.2cm、残存高7.4cmで、筒部は坏部側にしづらされている。外面は縦位のヘラミガキがなされ、内面は、筒部にあっては縦位にナデつけられており、基底部にあっては、横へのナデ調整されている。

円盤状土製品 赤焼け（橙色）であるが須恵器である。第4号、第6号住居跡埋土上位からも同一個体のものと思われる破片が発見されているが、南東角土壌中から出土しているので、第7号住居跡に起因する破片と思われる。

推定径10.9cmになり、厚さは0.9cmである。櫛状工具で波状文を二重にめぐらしてある。

##### 5) 第16号住居跡（図15、写真9）

第1次調査区Ⅱ-10d、Ⅲ-1d区にまたがって位置する。検出面となる部分が天地がえしなどで搅乱されており、その存在は最後になって判明した。その範囲もわかりにくく、その結果、土層観察用のベルトが住居跡に対して斜めに入ることとなってしまった。この住居跡は、第1号住居跡及び第4号住居跡に切られている。

（平面形・方向） 南北約4.1m、東西約4.7mの隅丸長方形を呈しており、東壁中央にカマドを有し、南東コーナーには、径約85cm、深さ約90cmの土壌がある。柱穴は不明である。長軸方向は、磁北に対してN66°Eと東に偏している。カマドは第4号住居跡に切られているが、幅約0.6m、長さ約0.5mである。

（堆積土） 堆積土は細分すれば2枚であり、明黄褐色と黄褐色の砂質シルトである。検出面

写真9  
第16号住居跡  
(S→N)



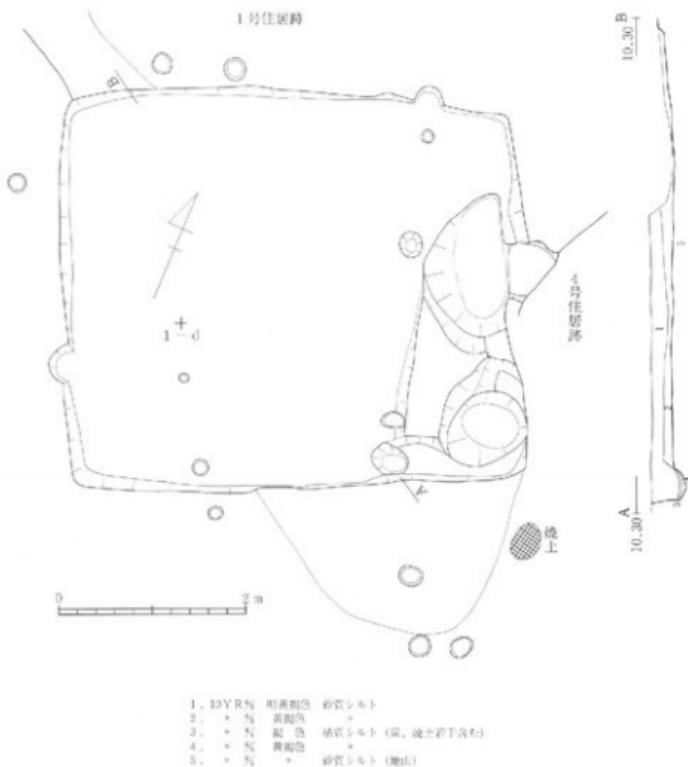


図15 第16号住居跡

からの厚さは約22cmである。

(床面) 貼床ではなく、黄褐色粘質シルトの地山面が生活面となる。堆積土及び床面からも遺物は若干出土するが、そのほとんどは、南東コーナーの土壤及びその周囲からである。床面を全体的に見ると、若干であるが中央部がレンズ状にくぼんでいる。

(出土遺物) (図16) 土師器の壺、甌、須恵器の蓋、器台片、管玉や小玉の石製模造品、鉄製品が出土している。

坏 3点出土して、ともに土壤内出土である。それぞれタイプを異にするので1点ずつ説明を加える。図16-1は瓦破片であった。胎土には若干の砂粒を含み、焼成は普通で、色調は内外

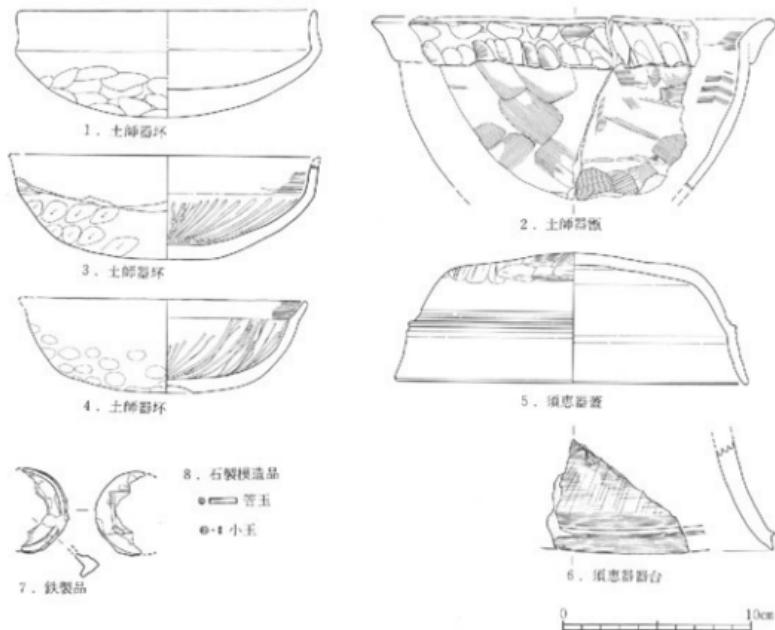


図16 第16号住居跡出土遺物実測図

面とも橙色である。丸底の底部から、緩やかなカーブをもなながら立ち上がり、口縁部で急に内弯し、また外反して口唇部へ至る断面を呈する。調整は磨耗していく明瞭ではないが、体部下半が手持ちヘラケズリされており、口縁部内面から体部上位の外面にかけて横位のナデ調整痕らしきものが観察される。口縁部径16cm、器高5.7cmである。

図16-4は底面に丸く、くぼみのある平底風丸底で、口縁部までは内寄しながら立ち上がり、口縁部は、内弯気味に外側へ短く引き出されている。胎土、焼成とも良好であり、色調は橙色である。体部外面には、手持ちのヘラケズリ痕がかすかに観察される。内面は、口縁部が横位のハケ目調整、体部は縦位のヘラミガキ調整痕が見られる。口縁径は15cm、器高は6cmを計る。

図16-3は器形が前2者の中間で、丸底。口縁径16cm、器高5.5cmは口唇部が欠損しているため推定値である。胎土には砂粒を若干含み、焼成良好で赤色を呈している。体部外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキされ、口縁部内面はナデ調整されている。

観 土壙内から出土した。推定口径21.4cm、残存高9.7cmである。複合口縁になつてお、「く」の字口縁となっている。口縁部外面及び体部外面はヘラケズリされており、カーボンが付着し

ている。内面は口縁部は横位のナデ調整が、また体部は若干ハケ目が観察される。胎土には若干だが砂粒を含み、焼成は普通で、色は、内面がにぶい橙色、外面が浅黄橙色を呈する。

蓋 須恵器であり、ロクロを使用している。天井部は平らに近く、器高が7cm、口縁部を隔する稜線は、口縁部端部から3cm上に位置する。口縁部は若干外反している。口径は18.6cmである。稜線は、その上方、下方を若干くぼめることによって、一層シャープな状況を出している。天井部外面には、かすかに、手持ちヘラケズリ痕が見られる。カキ目痕は見られない。胎土には砂粒を若干含み、色調は外面が灰色、内面が灰白色を呈する。これも土壤から出土した。

石製模造品 滑石製の管玉と小玉が各1点出土した。管玉は長さ1.5cm、口径0.3cm、小玉は径0.4cm、厚さ0.1cmを計る。孔は片面穿孔である。

鉄製品 品名は不明であるが、円形の物の2枚破片である。円周辺は約1cmと厚くなっているが、内側が約0.2cmと薄いものである。また片面をみると、内部が方形に薄くなっている。

## 6) 第4号住居跡 (図17、写真10)

第1次調査区III-1 e ポイント周辺に位置する。第16号住居跡と第7号住居跡を切っており、

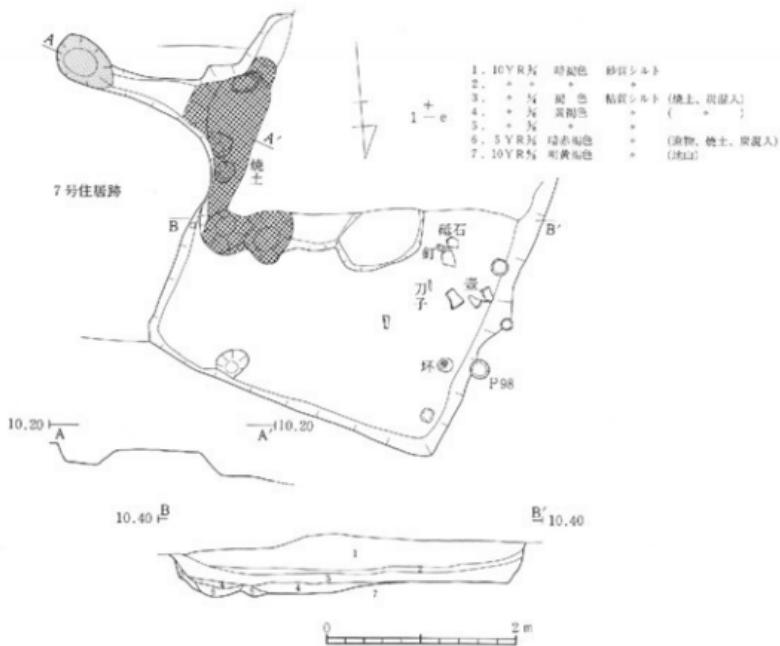


図17 第4号住居跡

写真10  
第4号住居跡  
(E→W)

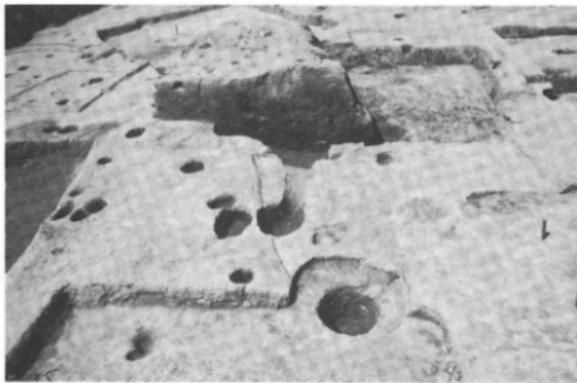


写真11  
第4号住居跡  
遺物出土状況



遺構の増改築は認められない。なお1eポイントは100mごとのコンクリート基準杭であり、その杭を動かさないため、4号住居跡は完掘できなかった。

(平面形・方向) 約3.2×3.7m の方形に近いプランを呈し、カマドを通る軸方向は磁北に対して N113°E と傾いている。カマドの施設は住居東壁に設置され、焼成部と煙道部からなる。焚口を中心としてその両側に土壇をもち、多量の焼土に混って土師器壊片などを出土している。長さ約1.9mの煙道部は地山を掘り抜いて造られ、先端の煙出しはピット状になっている。周溝は見あたらず、壁の立ち上がりは比較的急である。

(堆積土) 住居内堆積土は大きく3層に分れる。上から暗褐色の砂質シルト、褐色の粘質シルトが床面まで0.4~0.5mの厚さで堆積している。また床面上、土壤には遺物、焼土、炭を混入した

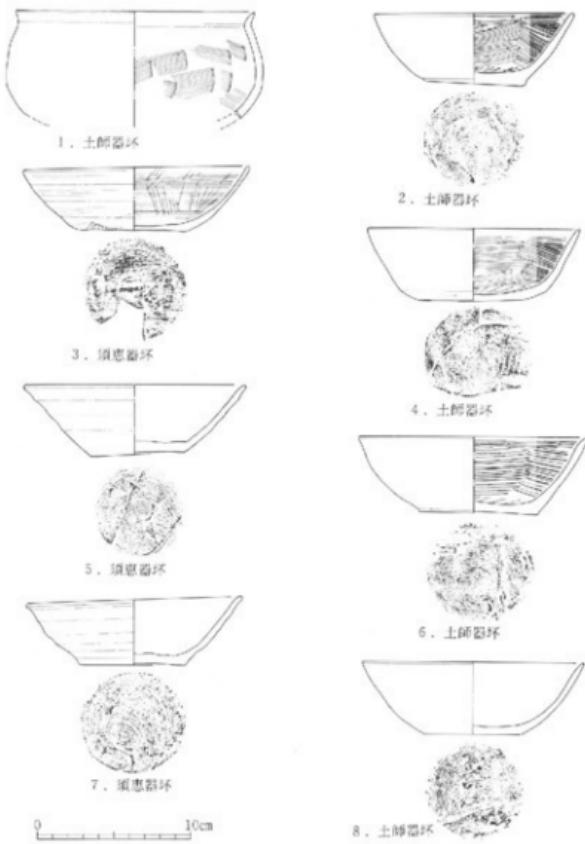


図18 第4号住居跡出土遺物実測図(1)

暗赤褐色の粘質シルトが堆積している。

(床面) 貼床ではなく、ほぼ平坦であるが、カマド周辺は掘り方が床面よりやや深くなっている。柱穴は不明であるが、壁に沿ってピットが少し見られる。

(出土遺物) (図18、19、20) 出土遺物は比較的多く、土師器環、須恵器環の完形品、刀子などの鉄製品が床面から出土している。その他は土師器甕、須恵器長頸壺、磁石、鉄釘などである。

坏 西側床面、壁に沿って出土したものがほとんどで、須恵器も土師器もロクロを使用してあ

る。ただし図18-1の环は古墳時代のものであり、堆積土の上層に混入したものである。

須恵器环は図18-3、5、7で、3は回転ヘラ切り底を一方向にヘラケズリ調整している。5、7は回転糸切り底無調整である。土師器环は図18-2、4、6、8、図19-1である。図18-4、図19-1は丁寧にヘラケズリされていて、切り離し技法は不明であるが、他は回転糸切り底で調整のないものである。

長胴甕 図19-2、3がそれである。2は胎土に砂粒を含むものであり、焼成は良好である。口縁部は椭円形にゆがんでいる。内外面ともロクロによるハケ目調整されている。口縁部は、いわゆる「く」の字形をしているが、口唇部に至るところにおいて、若干立ち上がりを見せる。

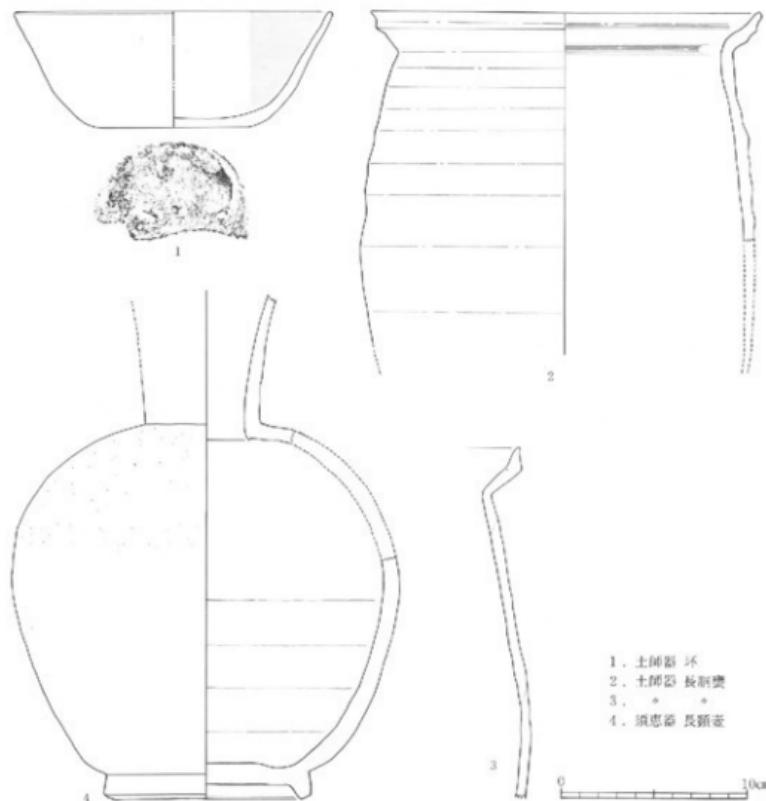


図19 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

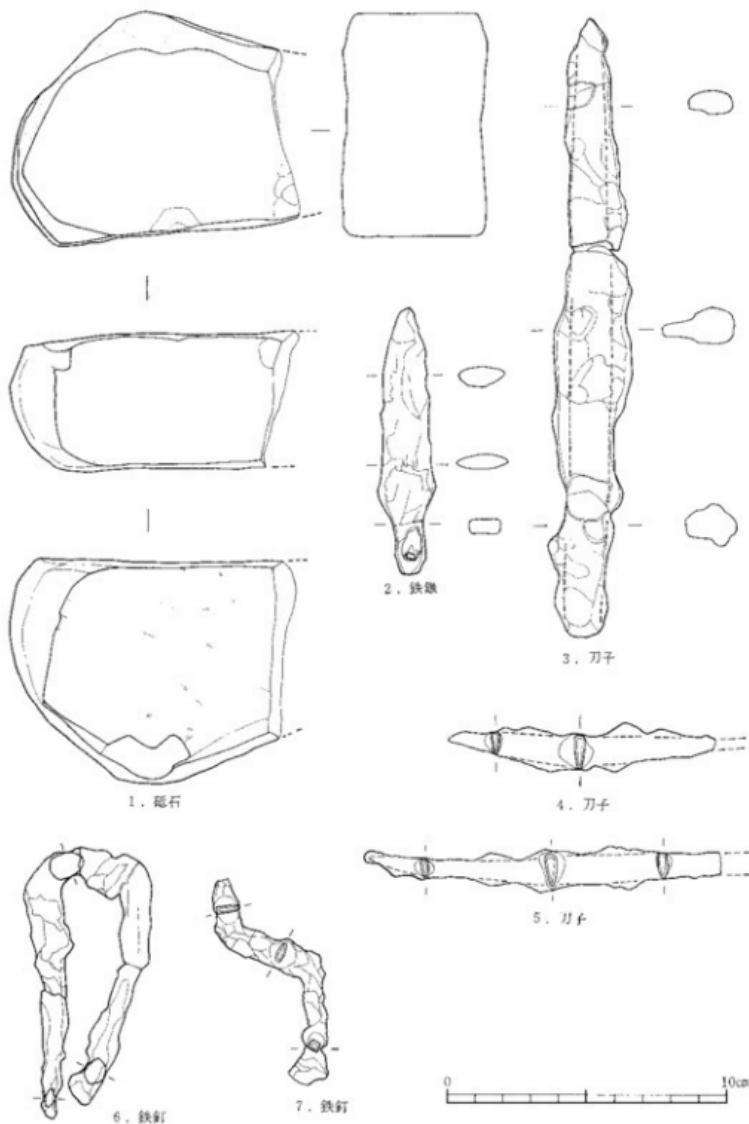


图20 第4号住居跡出土遺物実測図(3)

3も口縁部は「く」の字口縁になるが、2よりも直線的であり、口唇部への立ち上がりは直立する感じになる。内外面ともロクロによるナデ調整がされているが、体部中位以下には継位のヘラケズリ痕が認められる。

**長頸壺** 図19—4がそれである。台付で残存器高26.9cm、体部最大径20.8cmを計る。須恵器であるが、外面全体が茶褐色を呈しており、体部上位の肩部にあたる部分に灰がかかっている。外面はロクロによるナデ調整がなされている。

**石製品** 図20—1の砥石は、西壁に沿った床面から出土している。また実測図にはないが、カマド左袖付近から径約8cmの丸い磨石が出土している。

**鉄製品** 鉄鎌(図20—2)、刀子(図20—3、4、5)、釘(図20—6、7)が出土したほか、細い破片はもう少しある。2の鉄鎌は長さ10.5cmもあり、槍先の様相を呈している。6の鉄釘は「カスガイ」と思われる。7は鉄釘としておいたが、断定はむずかしい。

#### 7) 第6号住居跡(図21、写真12)

第1次調査区II—10d、e区にある。

(平面形・方向) 約3.9×3.7mの隅丸方形プランである。カマドは東壁南寄りに位置しており、その両袖に約0.7×1mの土壇をもち、左袖側にある土壤には焼土が多量に混入していた。

図21  
第6号住居跡

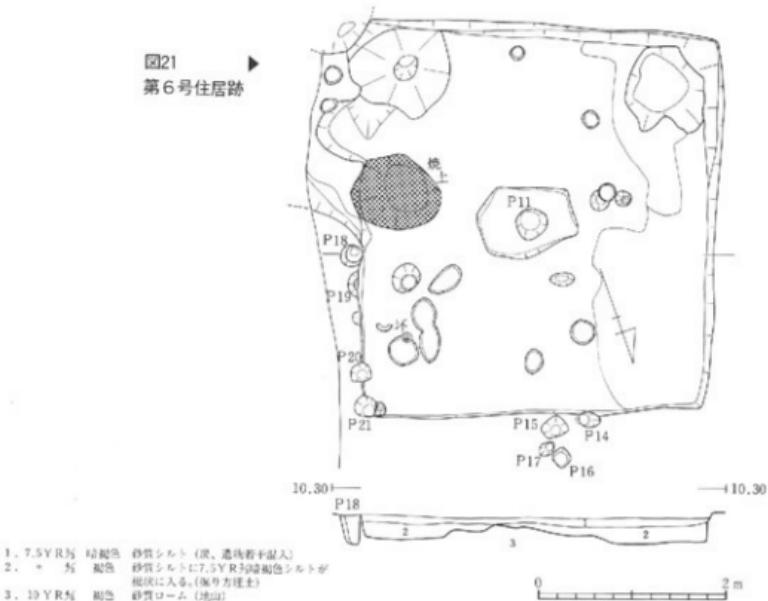
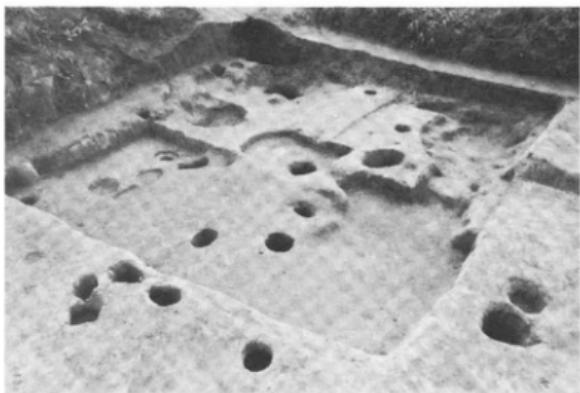


写真12  
第6号住居跡  
(N→S)



カマドをとおる軸方向は磁北に対して N108°E と東に偏している。柱穴ははっきりしない。

(堆積土) 図21の断面図のとおりであるが、住居内堆積土としてとらえられるのは埋1層の炭、遺物を若干混入する暗褐色砂質シルトだけで、2層目は褐色砂質シルトに暗褐色シルトが板状に入り込んで、住居跡掘り方の埋土にあたるものと思われる。埋2層上面が生活面と考えられる。地山は褐色砂質ロームである。

(床面) 床面は堆積土でもふれたが、埋2層を上面とするところである。カマドは東側に約0.5mの長さがあるだけで短いものであるが、埋1層が約12cmと浅いことを考えれば、煙道のはとんどが削平されたことも考えられる。

(出土遺物) (図22) 床面から出土したのは、土師器、須恵器の环であるが、埋土中からは重弁蓮華文軒丸瓦片、須恵器の脚部片が出土している。

环 1は土師器の内黒の环である。胎土には砂粒が混入されており、全体的に磨耗が著しく調整不明である。かすかに底部切り離しが回転糸切り技法で行なわれたことがわかる。2は須恵器の环である。胎土、焼成とも良好で、色調は灰白色を呈している。底部は回転糸切り痕を残しており、未調整のものである。

脚 黄橙色をしており、土師器のような色を呈しているが須恵器である。4は、第4号住居跡と第6号住居跡出土の破片各2点が接合しているものであり、5も4と同様のものである。器部と脚部と接するところの径は、推定であるが9.4cmとなり、残存高は7.5cmである。

外面は器部との接点部付近がヘラで横ナデされているほか、脚部全体が縦位にヘラナデされている。残存破片で観察するかぎりは、その脚部に波状文沈線が、2段にめぐらされている。内面は、全体を縦にヘラナデしたあと、器部接点部付近を横方向のヘラナデ調整している。

脚とは異なるが、同様のものとして、第7号住居跡で実測図として出している円盤状の土製品の1片は、この住居跡から出土している。

**重弁蓮華文軒丸瓦** 3  
に示すような小破片である。瓦当周縁部も欠損している。弁は上面がほぼ平らになるもの

で「単弁」的な要素をもつものである。弁の先端は丸くなっている。その部分で最大幅となる。また弁と周縁との間に圓線として稜をなしているのが観察される。

#### 8) 第8号住居跡 (図23、写真13)

第2次調査区II-5 d、e区に位置する。削平が著しく、床面までの深さは約10cmである。平面形は、南北約4.2m、東西3mの隅丸長方形を呈しており、西壁でみた方向は、磁北に対してN30°Wと西に傾いている。南壁沿いに焼土が若干みられるが、カマド施設はない。住居跡内の北西、南西、南東角に浅い土壤があり(それぞれa、b、cとした)、b、cの土壤内には若干、土師器の壺、斐片が入っていた。ピットは検出されているが、柱穴になるものは把握できない。

#### 9) 第9号住居跡 (図25、写真14)

第2次調査区II-4 c、d区に位置している。検出面は天地がえしの痕跡が柱状に残っている。第11号溝と第15号住居跡に切られており、南西角は調査区外になっている。

(平面形・方向) 南北約4.7m、東西約4.6mの隅丸方形プランをしており、カマドは北壁東

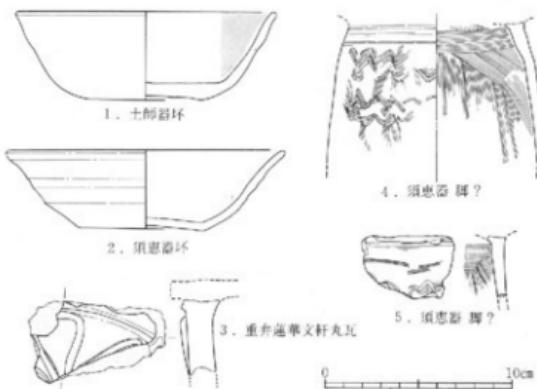


図22 第6号住居跡出土遺物実測図

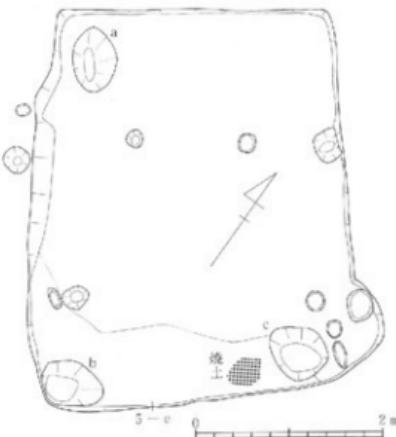
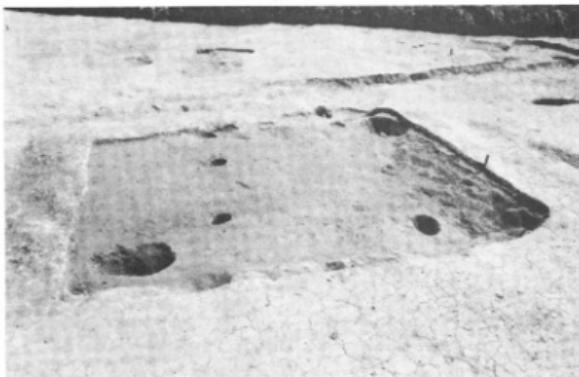


図23 第8号住居跡



◆写真13  
第8号住居跡  
(W→E)



◆写真14  
第9号住居跡  
(N→S)



◆写真15  
第9号住居跡土壤内  
遺物出土状況

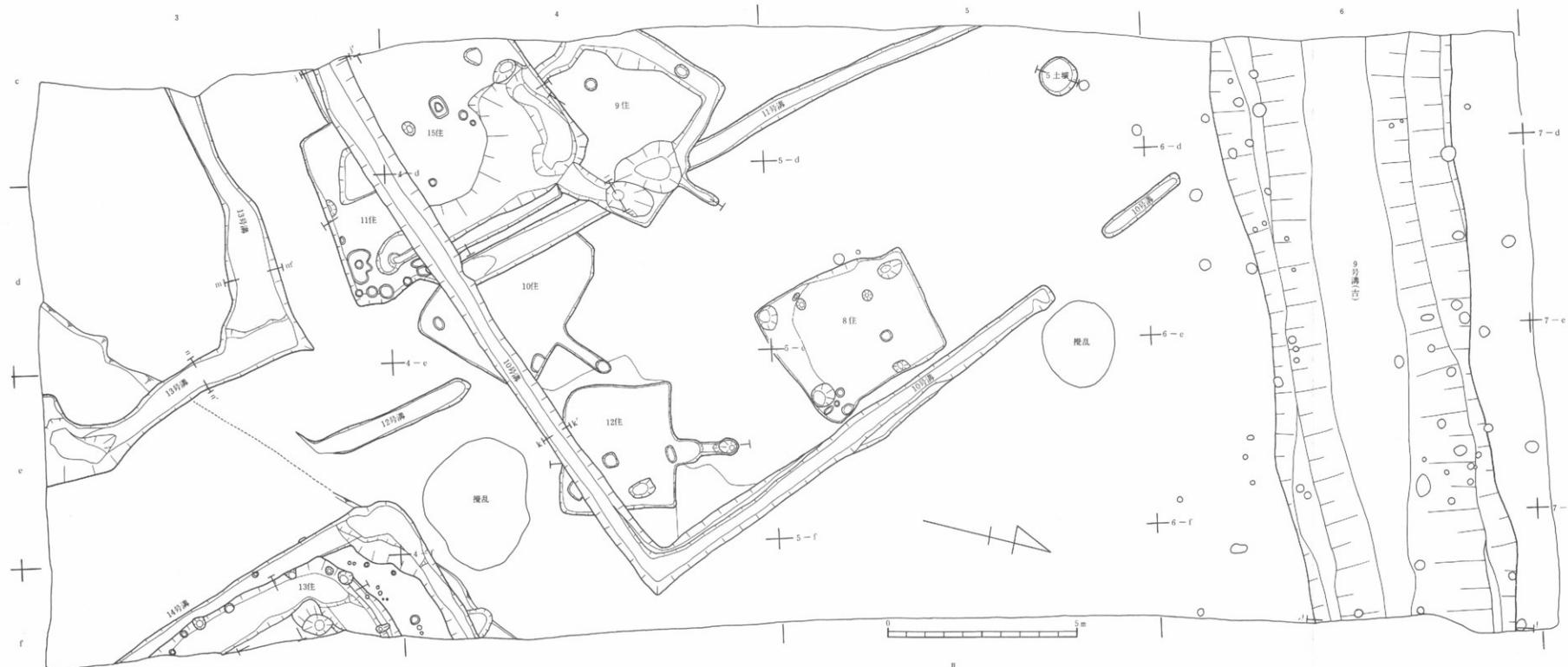


図24 第2次調査区遺構配置図

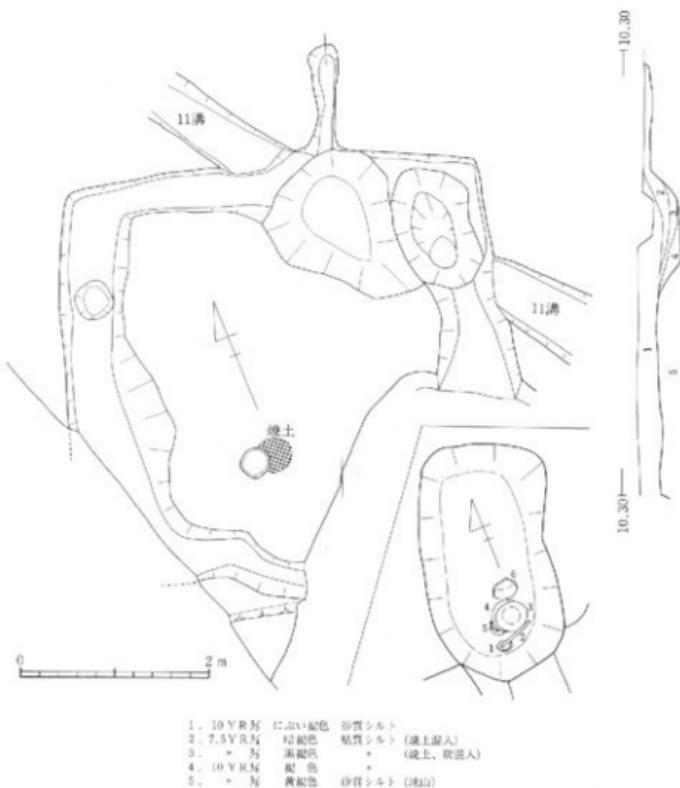


図25 第9号住居跡

寄りにとりについて、煙道の長さは約1.1mを計る。カマド方向はN20°Eとなっている。カマド焚口前面及び北東角に土壤を有しているほか、壁に沿って幅が0.45~0.7mの周溝が施設されている。柱穴に相当するものは発見できなかった。

(堆積土) 住居跡床面上はにぼい褐色砂質シルト1層であるが、焚口前面の土壤には、焼土、炭を混入する暗褐色、黒褐色粘質シルトが堆積している。

(床面) 貼床ではなく、黄褐色砂質シルトの地山が生活面となっている。床面中央南寄りに、一部床面が焼けているところがある。

(出土遺物) (図26) 出土遺物のほとんどは、カマド及び土壤周辺、土壤内からのものである。その種類は、土師器、須恵器の壺、土師器壺、鉄鎌、刀子である。なお土壤中出土遺物は平面図の遺物番号と合うようにナンバーを付っておいた。

**环** 土師器環は2、3、4の3点で、内黒である。2が高台付環で、底面は回転ヘラ調整されてある。3は底部が回転糸切りで未調整、内面のヘラミガキは若干である。4は底部切り離しが回転糸切りであり、そのあと回転ヘラケズリ調整されている。全体的に磨耗しており、体部調整痕ははっきりしない。

須恵器の环は1で、緑灰色を呈し、底部は回転糸切り技法で未調整である。

**壺** 底部径9.5cm、残存高9cmである。胎土に小石、砂粒を含み、浅黄褐色を呈している。底部は手持ちヘラケズリされているようであるが明瞭でない。外面体部は縦位のヘラケズリ、内面体部はハケ目、内面底部は横位のヘラナデ調整が行なわれている。

**鉄製品** 刀子2点と鉄鎌1点である。6の刀子は南壁寄りの周溝から、8の鉄鎌はカマド右袖の壁のところから出土している。

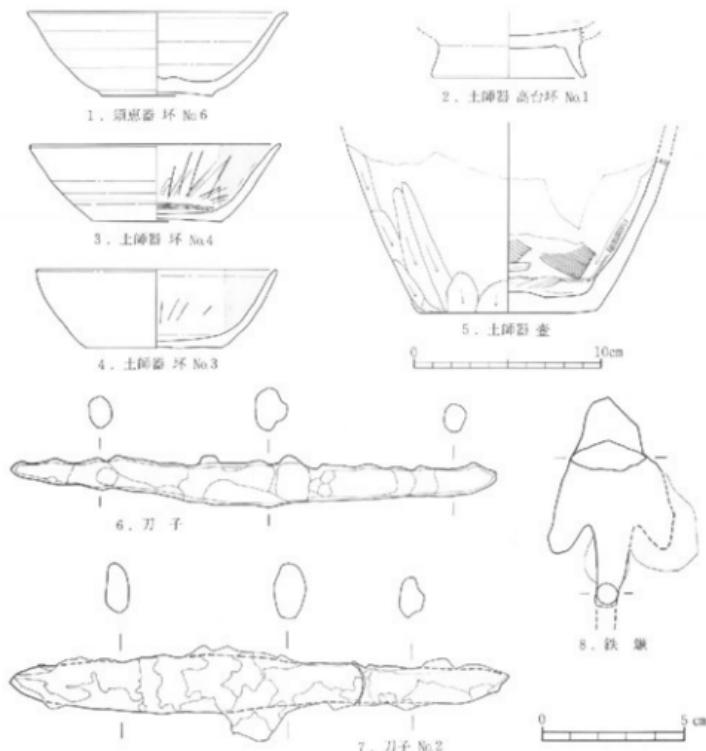


図26 第9号住居出土遺物実測図

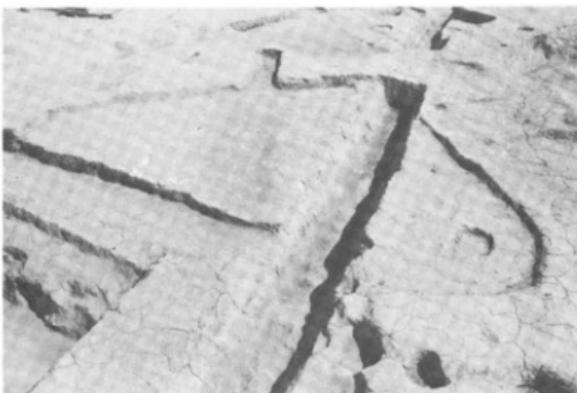
10) 第10号住居跡(図27、写真16)

第2次調査区II-4 d区に位置している。削平が激しく、壁の高さは5cmほどで、遺物も上師器の小片が若干出土したのみである。第10号溝、第11号溝に切られている。カマドは北壁や東寄りに施設されているが、焼土、炭もほとんど検出できない。3.7m×4mほどの隅丸方形の平面形をしており、カマドの煙道の長さは約1.75mである。カマドを通る輪方向は、ほぼN12°Eとなっている。



図27 第10号住居跡

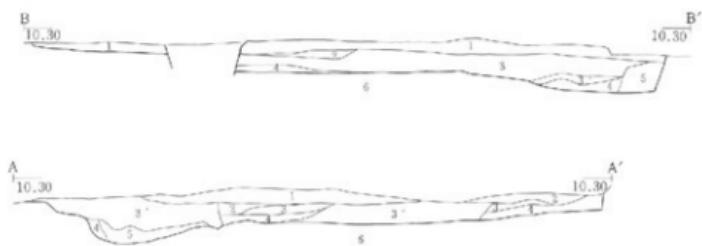
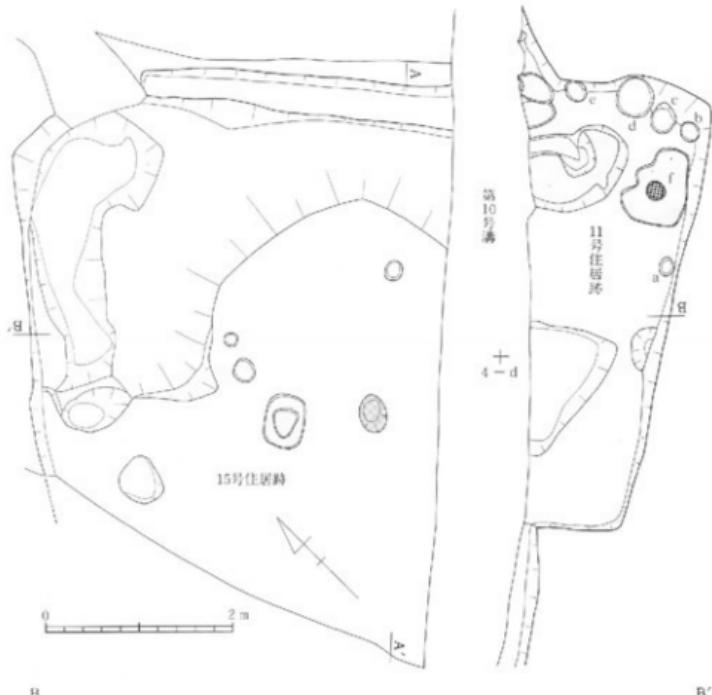
写真16  
第10号住居跡  
(S→N)



11) 第11号住居跡(図28、写真20)

第2次調査区II-4 dポイントを中心として残存し、第15号住居跡、第10号溝に切られている。そのため住居跡面積の約1/2が残存しているだけの状況である。

(平面形・方向) 4.6×6.1mの隅丸長方形を呈する。カマドは北壁東寄りの位置にあたり、



ピット a.	7.5 YR 5/4	暗褐色	粘質シルト
b.	*	*	*
c.	*	*	(炭素入)
d.	*	5/4	褐色
e.	*	5/4	深褐色
f.	10 YR 5/4	黑褐色	(炭、炭素入)
1.	10 YR 5/6	紅褐色・黒褐色	砂質シルト
2.	*	5/6	黃褐色
3.	*	5/6	明褐色
3'.	*	5/6	褐色
4.	7.5 YR 5/6	明褐色	粘質シルト
5.	*	5/6	明褐色
6.	10 YR 5/6	褐色	(地上侵入)
			(地L)

図28 第11・15号住居跡

第10号溝によって、その大部分が切られている。カマドを通る軸方向は、東壁で推定すれば磁北に対してN55°Eとなっている。

(堆積土) 削平が著しく、壁高約5cmで、にぶい黄褐色砂質シルトが1層である。削平度合いによっては床面が露出しているような部分もある。

(床面) 貼床はなく、褐色の粘質シルトの地山が生活面となっている。カマド右袖側の床面には、擾乱がされてもはっきりしないが、ピット、土壙があり、焼土、炭、灰が混入している。

(出土遺物) (図29、31) 出土したのは土師器環、鎌、刀子、石製模造品などである。

环 内黒土師器で底部は回転糸切りされ、その周縁部はヘラナデ消されている。全体的に磨耗しているが、外面下位は特に著しい。内面口縁部付近に横位のヘラミガキが観察される。

鉄製品 図29-1の鎌と図29-2の刀子がそれである。鎌は平面図のピット付近の焼土や炭の上にのるように検出された。ほとんど検出面と差がないレベルである。

石製模造品 図29-3のものである。勾玉の模造品であろうか、スレート製である。小円孔が1つ、両面穿孔されている。

## 12) 第12号住居跡 (図30、写真17)

第2次調査区II-4eに位置している。これも保存が不良で壁高がそれほどない。第10号溝に切られている。

(平面形・方向) 南北3m、東西3.3mの方形プランである。カマドは北壁ほぼ中央に施設されており、煙道部の長さは約1.6mである。カマドを通る軸の方向は、磁北に対して、約14°ほど西へ偏している。

(堆積土) レンズ状の堆積になっており、床面上は、褐色砂質シルトと褐色粘質シルトが堆積している。カマドの煙道、煙出し部は、暗赤褐色、黒褐色の焼土、炭が混入した土層と

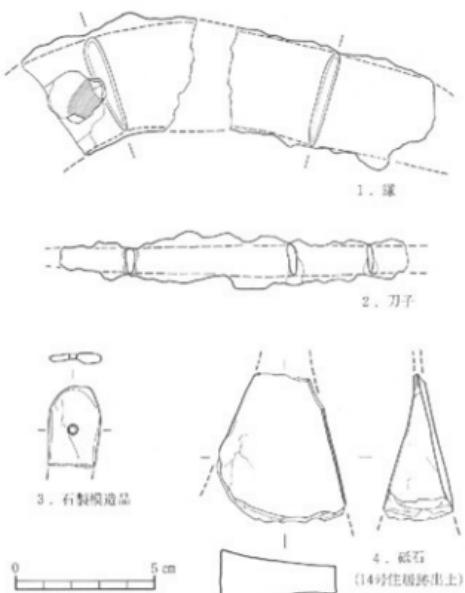


図29 第11・14号住居跡出土遺物実測図

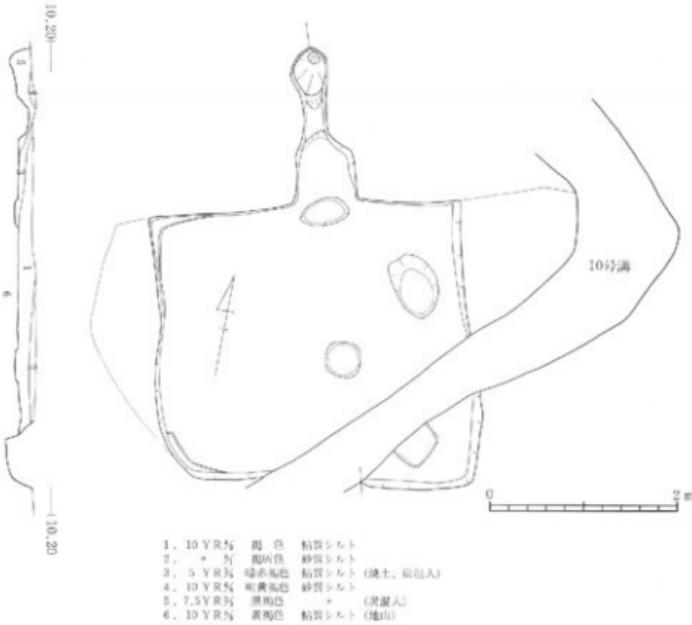


図30 第12号住居跡



写真17  
第12号住居跡  
(S→N)

なっている。

(床面) 貼床はなく、黄褐色粘質シルトの地山が床面となっている。柱穴などの検出はなく、浅い、小さな土壤が、4箇所に認められるだけである。

(出土遺物) (図31-2) 土師器の壺が1点出土した。口径14cm、底径8.3cm、器高14cmのも

のである。底部には木葉痕がついており、ほぼその中央に小さな穴が穿たれている。口縁部は「く」の字口縁をしており、口唇部は丸くおさめてある。口縁部内面には浅い1本の沈線がめぐっている。体部内面にはハケ目状の横位のヘラナデがなされている。外面は磨耗しており、調整は不明である。

### 13) 第13号住居跡（図32、写真18）

第2次調査区II-3 fを中心位置する。そのほとんどが調査区外に出ており、全体を把握できない。第14号溝を切っている。

**(平面形・方向)** 平面形は、北壁の一部、西壁の一部だけしか検出されていないのでわからないが、隅丸長方形と推定される。検出壁長は東西約3m、南北約5mであるので、それ以上の規模をもつ住居となる。

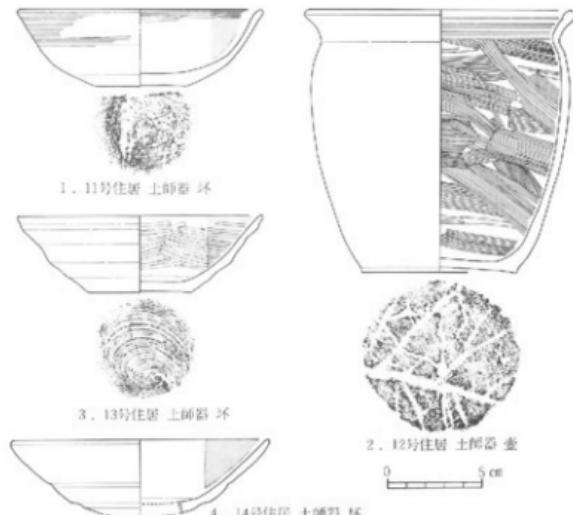


図31 第11・12・13・14号住居跡出土遺物実測図

写真18  
第13号住居跡  
(N→S)



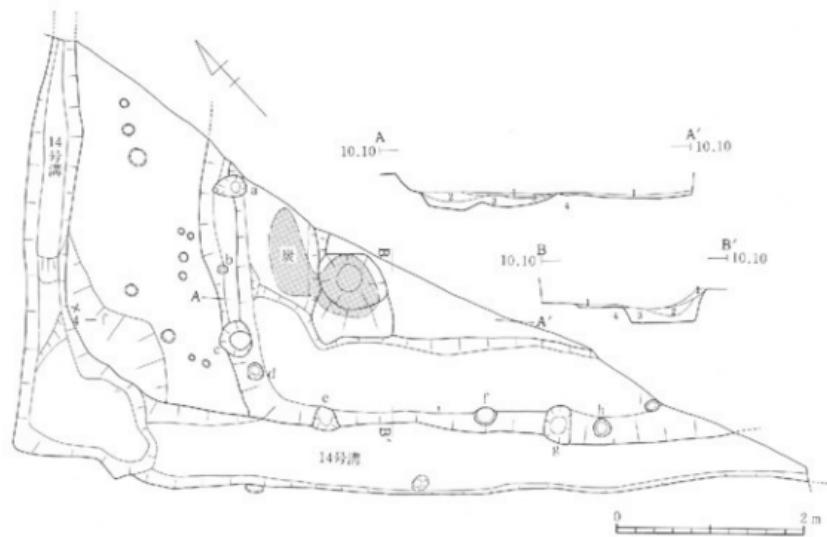


図32 第13号住居跡

壁に沿って壁柱穴が検出され、また、その周囲を幅0.7~1mの周溝がめぐっている。また北西角の床面には0.6×0.8m、床面からの深さ0.5mほどの土壌がある。

(堆積土) 堆積土上層は、灰黄褐色、にぶい黄橙色砂質シルトであり、焼土を若干含んでいる。周溝内には、暗褐色粘質シルトが堆積しており、焼土、炭を含んでいる。

(床面) 贊床ではなく、黄褐色砂質シルトの地山が生活面となっている。床面及び土壌中からは多量の炭のほか、焼土、灰が検出される。

(出土遺物) (図31-3) この図面に出したのは、埋2層から出土した土師器の环であるが、平面図の壁柱穴cからは土師器の壺の底部片が出土し、また土壌からも須恵器、土師器の小破片が出土している。

図31-3の环は内黒であり、底部は回転糸切り無調整である。胎土には砂粒を含み、焼成はあまり良くない。色調は橙色を呈する。内面は横位のヘラミガキされている。

#### 14) 第14号住居跡 (図33、写真19)

第1次調査区Ⅲ—1 c、d区に位置している。第1号溝に切られており、第1号住居跡を切っている。はじめ検出面が天地がえしなどで擾乱されていたため、その存在がわからず、カマド煙道の突出しだけが、P56となっているように、焼土、炭を多量に含むピットとしてとらえられていた。

(平面形・方向) 東西約3.5m×南北約3.2mの隅丸方形の平面を呈しており、カマドは東壁の南寄りに施設されている。その煙道の長さは約1.8mを計る。カマドを通る主軸方向は、磁北に対してN123°Eと大幅に東に傾いている。

住居内部には、周溝、土礫がみられるが、周溝と見えるよりも、ベット状に高くなっている床面が、カマドとは反対側の北半分を占めていると表現した方が適切かもしれない。

(堆積土) 住居跡内全体は褐色粘質シルトの堆積であり、カマドの前庭部にあたるところには、炭混入の黒褐色粘質シルトが堆積している。遺物は少ないが、土器片はほとんど、この辺から出土している。

(床面) 貼床はない。褐色ロームの地山が生活面をなしている。平面形のところでもふれたが、ベット状の高床を施設し、住居内が機能別構造になっている。柱穴は不明である。

(出土遺物) (図29、31) 図にしたのは、図31—4の内黒土師器環と、図29—4の砥石であるが、その他に土師器壺、甕の破片が若干出土している。

図31—4の内黒土師器環は、胎土に砂粒を含み、焼成も不良で、もろいものである。色調は褐色を呈している。底部は欠損しているが、破片から推定すると丸底風であり、体部外面に二重の沈線がめぐっている。内面は横位にヘルミガキされているようであるが、

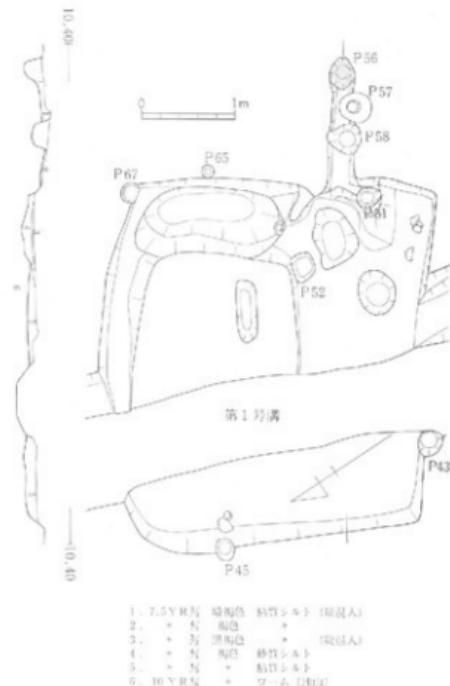


図33 第14号住居跡

はっきりしない。

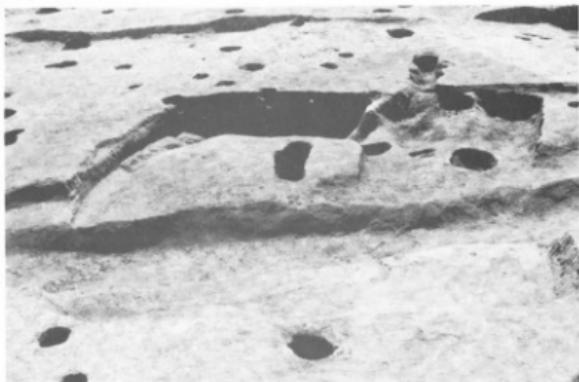


写真19  
第14号住居跡  
(W→E)

#### 15) 第15号住居跡 (図28、写真20)

第2次調査区II-4 d ポイントを中心として存在する。第10号溝に切られ、第11号住居跡を切っている。保存が悪く、遺物も少ない。また南西側は調査区外になっており、全様は不明である。

(平面形・方向) 全様は不明であるが、ほぼ $5\text{ m} \times (5.7+\alpha)\text{ m}$ の隅丸長方形プランとなるものと思われる。カマドの有無については不明である。住居跡床面中央部に、焼土、炭を混入するビットが2つある。東西壁で磁北との傾きを見れば、N $38^{\circ}\text{E}$ となる。

(堆積土) 平行堆積にはなっておらず、攪乱されたように入り組んでいる。特に中央部においては、黄褐色、明黄褐色、褐色の砂質、粘質シルトが混同し合って、その前後の層位との断絶がある。



写真20  
第11・15号住居跡  
(SW→NE)

(床面) 床面からも擾乱の感じがする。北、東壁の方に幅広く、深く、溝状に床が傾斜する。一応、床面を形成しているのは褐色の粘質シルトになっている。

(出土遺物) 実測できる大きさのものではなく、埋土中に須恵器、土師器の小破片が混入している。平安時代から古墳時代遺物片、弥生土器片まで混入しているが、数は少ない。

## (2) 焼土構造 (図34、写真21)

第1次調査区II-10c、d区にまたがって位置する。南側半分は調査区外になっている。楕円形状の浅い落ち込みであり、検出面には炭、焼土、灰が多量に分布して、遺物の混入も多い。遺物のほとんどは、第3号住居跡出土と同様の高環である。

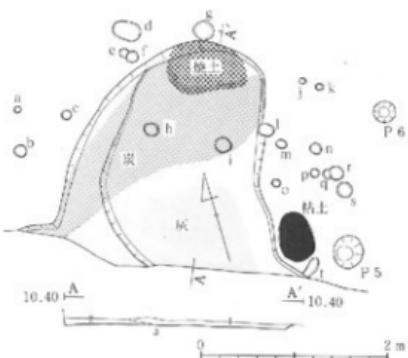
落ち込みは、現状では約5cmと浅く、すぐ、にぶい黄褐色粘質シルトの地山となる。炭、焼土、灰の分布範囲は図のとおりであるが、北端に焼土、それを取り巻くように炭、南側に灰とその分布を異にしている。

また同構外の南東隣りには、黄色の粘土が約0.6×0.4mの範囲に存在している。

## (3) 土壌 (図36、37、写真22、23、24)

当初第1号土壌から第5号土壌まで土壌として扱っていたが、調査の経過により、第2号土壌が溝であることがわかり第15号溝と改称し、第4号土壌が住居跡であったので第13号住居跡と改称した。よって第2号土壌と第4号土壌は欠番となっている。

第1号土壌(写22)は第1次調査区III-2c、d区にまたがってあり、第15号溝に切られている。また、この土壌の西半分は調査区外になっている。出土遺物は図35-3の青磁片のほかは皆無である。



ピット	色	粘質シルト
b.	*	*
c.	*	*
d.	■	■
e.	■	■
f.	■	■
g.	■	■
h.	■	■
i.	■	■
j.	■	■
k.	*	*
l.	■	■
m.	■	■
n.	■	■
o.	■	■
p.	*	*
q.	■	■
r.	■	■
s.	■	■
1. 10 YR 5/4	■	■
2. 7.5 YR 5/4	■	■
3. 10 YR 5/4	■	■

1. 10 YR 5/4 黒褐色 粘質シルト (炭、遺物混入)  
2. 7.5 YR 5/4 黄褐色 \* (須恵器)  
3. 10 YR 5/4 黄土色 \* (土師器)

図34 焼土構造

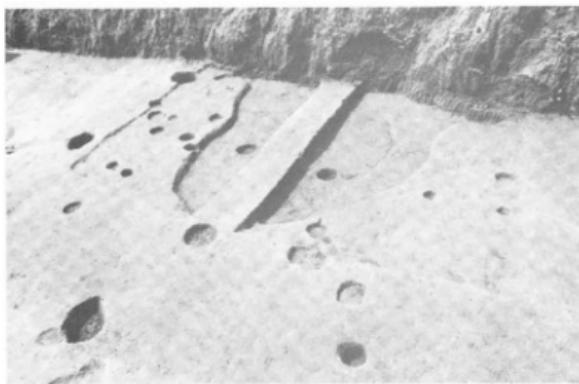


写真21  
焼土遺構  
(N→S)

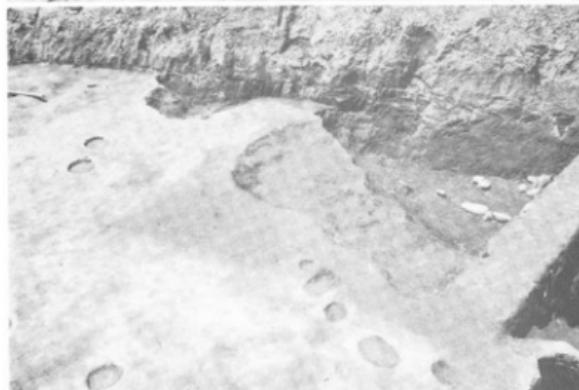


写真22  
第1号土壤・第15号溝  
(E→W)



写真23  
第3号土壤  
(E→W)

第3号土壌(図36)は、第1次調査区Ⅲ—2 c、d区にまたがっており、第15号溝に切られている。上塙の大きさは約2.4m×2mで、深さが約1.2mである。黒褐色、暗褐色、灰褐色、褐色の砂質、粘質シルトがレンズ状に堆積し、炭が層離面に薄く堆積している層が3枚ある。ここからは砥石(図35—5)、石硯(図35—6)、両面穿孔されている石製品(図35—4)のほか、土師器片、陶器片が若干出土している。

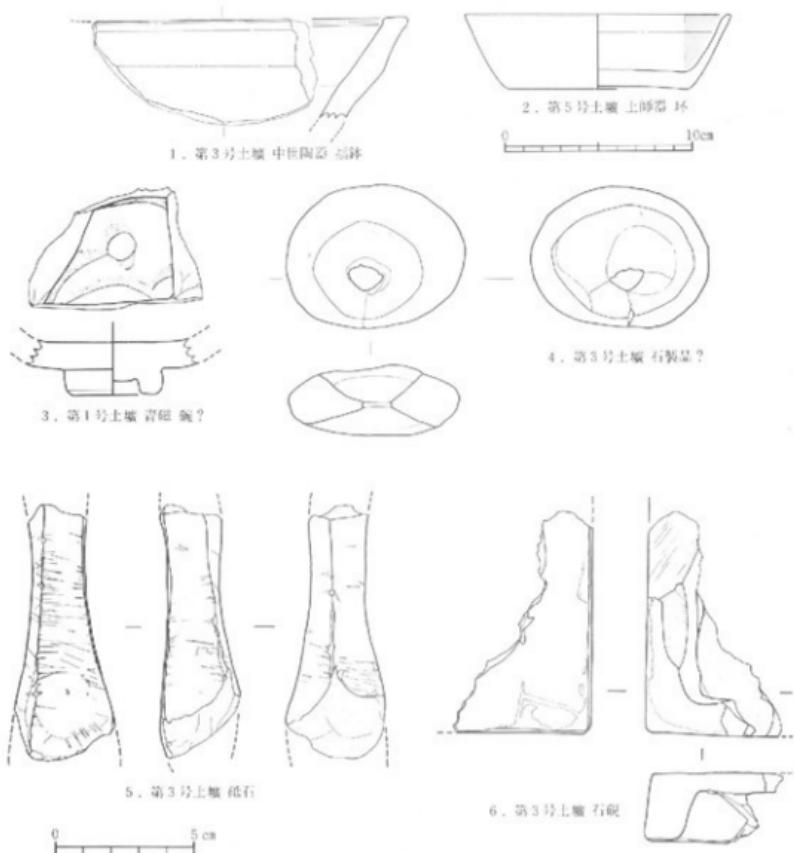


図35 土壤出土遺物実測図

第5号土壙(図37)は、第2次調査区II-5c区北側にあり、径約1mの、ほぼ円形に近い上端プランをもち、中で段をもつ断面を呈している。褐色、灰褐色粘質シルトがレンズ状に堆積しており、褐色ロームとその下の暗褐色砂礫の地山を掘り抜いている深さ約0.55mのものである。出土遺物は、断面図埋1層上面から内黒土師器の环(図35-2)が1点だけ出土した。

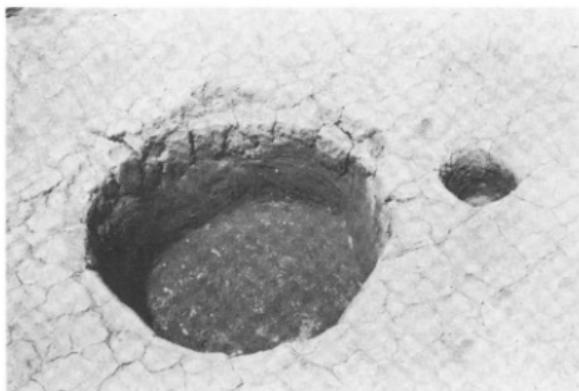


写真24  
第5号土壙  
(E→W)

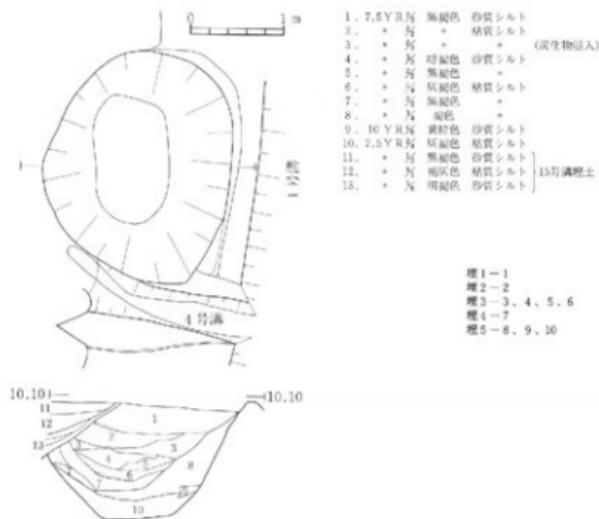


図36 第3号土壙

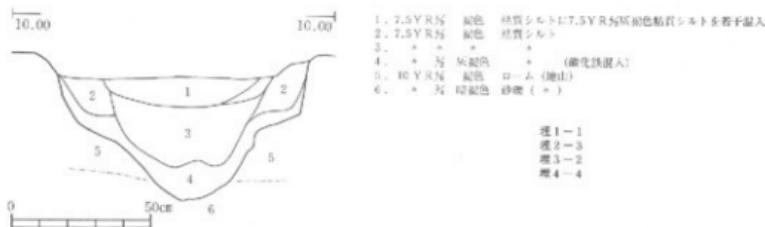


図37 第5号土壤断面図

#### (4) 溝 (図38~46、写真25~34)

第1号溝から第15号溝まである。第1次調査区で発見されたものは、第1号～第8号溝及び第15号溝、第2次調査区で発見されたものは、第9号溝～第14号溝である。このうち第12号溝は、溝として把えるのが適當か疑問はある。

これらを断面形で分類してみると、第1、2、6、9号溝がU字形、第3、5、10、11、12、13、14号溝が逆台形、第7、15号溝がV字形を呈している。第8号溝は若干しか掘り得なかつたので、その形態は不明である。

出土遺物は図47、48、49に示してある。その中でも第9号溝がその堆積土を大きく3層に分けることができ、出土遺物も多い。埋1層は弥生～中近世の遺物まで出土し、逆に埋3層は、高环などの古墳時代の遺物だけ出土している。

埋1層の遺物としては、朱を使用している須恵器壺の転用硯(図48-13)、土玉(図49-8)、焼羽口(図49-9、10)、埋2層からは石製の紡錘車(図49-7)なども出土している。

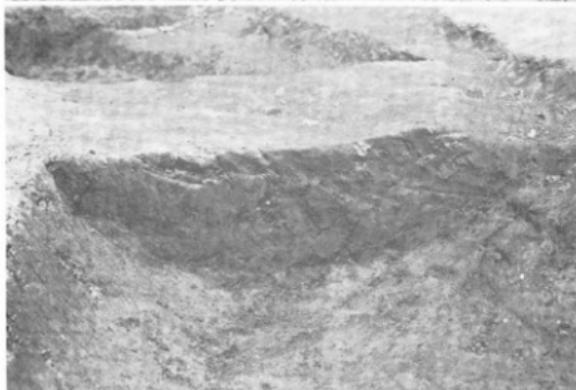
写真25  
第1次調査区  
溝掘上げ状況  
(N→S)



◀写真26  
第2次調査区  
溝掘上げ状況  
(S→N)



◀写真27  
第1号溝断面  
(S→N)



◀写真28  
第4号溝  
(S→N)



写真29  
第5号溝断面  
(W→E)

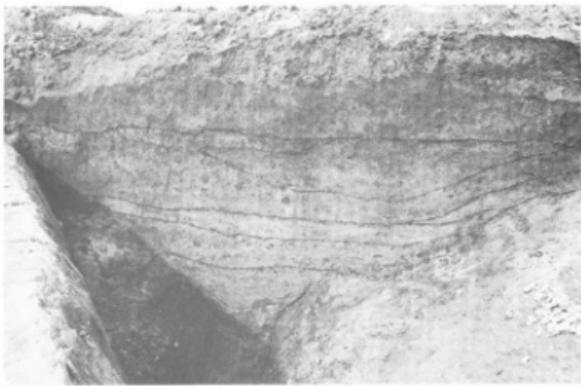


写真30  
第5・6号溝  
切合い状況  
(W→E)



写真31  
第6号溝  
(W→E)





◆写真32  
第7号溝断面  
(W→E)



◆写真33  
第9号溝  
(W→E)



◆写真34  
第15号溝断面  
(S→N)

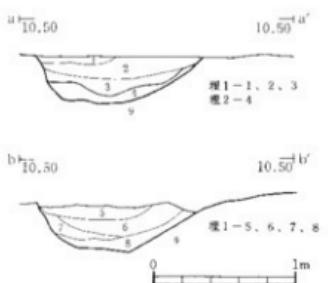


図38 第1号溝断面図

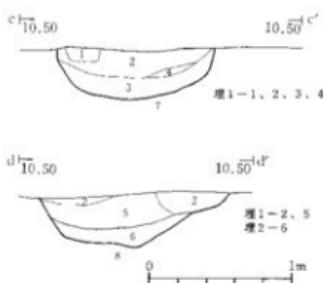


図39 第2号溝断面図

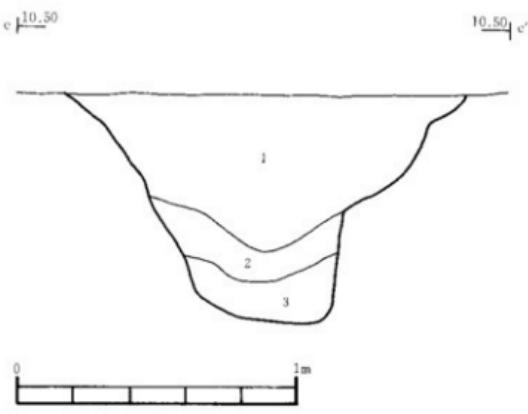


図40 第3号溝断面図

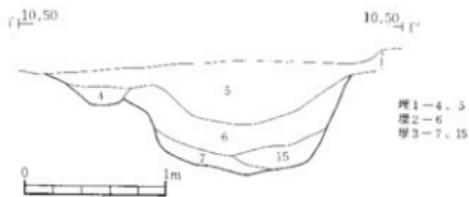


図41 第5号溝断面図

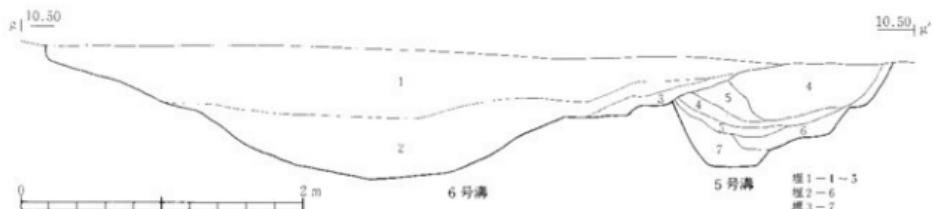


図42 第5・6号溝断面図

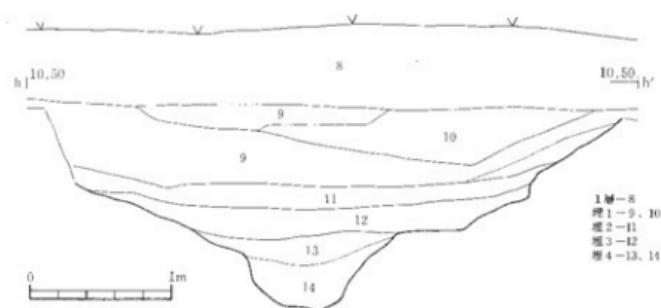
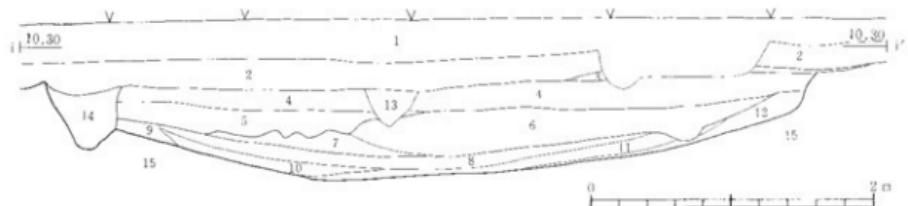


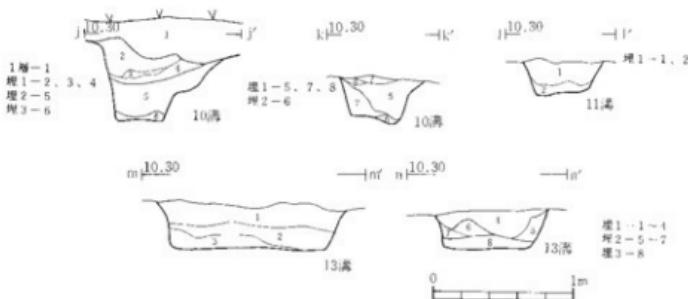
図43 第7号溝断面図

(5、6、7号溝)	1.	7.5 Y R	5	にぼい褐色	砂質シルト	
	2.	10 Y R	5	褐色	粘質シルト	
	3.	7.5 Y R	5	灰褐色	砂質シルト	
	4.	*	*	*	粘質シルト	
	5.	*	5	褐色	*	
	6.	*	5	黒褐色	*	
	7.	*	5	にぼい褐色	砂質シルト	
	8.	*	5	緑褐色	*	(発育上)
	9.	*	5	褐色	*	砂質シルト
	10.	*	5	暗褐色	*	砂質シルト
	11.	*	5	にぼい褐色	*	
	12.	*	5	灰褐色	*	
	13.	*	5	褐色	粘質シルト	薄い層の系なり
	14.	*	5	*	*	
	15.	10 Y R	5	にぼい黄褐色	砂質シルト	



1.	7.5YR	分	暗褐色	粘質シルト (耕作土)
2.	+	月	暗褐色	砂質シルト (天気せじ)
3.	+	分	*	*
4.	+	月	褐色	*
5.	+	月	暗褐色	粘質シルト
6.	+	分	暗褐色	*
7.	+	月	暗褐色	*
8.	10 YR	分	暗褐色	*
9.	7.5YR	分	褐色	*
10.	+	月	褐色	*
11.	+	月	灰褐色	*
12.	+	分	褐色	*
13.	+	月	黑褐色	砂質シルト
14.	+	分	褐色	粘質シルト
15.	10 YR	月	にかい暗褐色	粘質ローム (浅山)

図44 第9号溝断面図



(10号溝)	1.	7.5YR	分	褐色	シルト (耕作土)	(11号溝)	1.	10 YR	月	黒褐色	粘質シルト + 7.5YR 黑褐色シルト
2.	+	月	暗褐色	粘質シルト	*	2.	10 YR	月	褐色	粘質シルト	トキブコウタク状に合て。
3.	10 YR	分	黒褐色	*	(植物包入)	(13号溝)	1.	7.5YR	月	にかい褐色	粘質シルト
4.	7.5YR	分	暗褐色	*	(酸化鉄段入)	2.	+	月	褐色	*	(灰、植物混入)
5.	+	分	黒褐色	*	(酸化鉄段入)	3.	10 YR	月	暗褐色	*	
6.	+	月	*	砂質シルト		4.	+	月	暗褐色	*	(透水性子混入)
7.	+	月	にかい褐色	粘質シルト		5.	7.5YR	月	褐色	砂質シルト	
8.	+	月	褐色	砂質シルト		6.	10 YR	月	にかい黒褐色	粘質シルト	
						7.	+	月	暗褐色	*	
						8.	7.5YR	月	黒褐色	*	(透水性子混入)

図45 第10・11・13号溝断面図



図46 第15号溝断面図

### (5) III-2 f 区土壤状遺構 (図50)

第2号溝北壁にレンズ状の炭の層が2、3枚観察されたので、III-2 f 区を精査した。その結果、第2号と第5号溝に挟まれた地区で土壤状の落ち込みを発見した。その落ち込みには3層の炭層が認められ、古墳時代の遺物である土師器の器台(図59-1)、壺(図59-2)、環(図59-3)のほか、石製模造品(図60-9、11、12)も含めて多量に出土した。

器台は、脚部から環部は全体的に磨耗している。環部口径は21.7cm、脚部基底部径21.5cm、器高約18cmのものである。環部中位に対称形をなすように四つの円孔がある。脚部の基部には

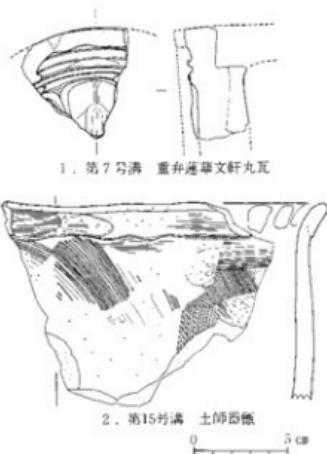


図47 溝出土遺物実測図(1)

高さ約0.8cmの段を有している。環部口縁部内外面は横位のナデ調整がなされており、環部の中位は縦位のヘラミガキがわずかに観察される。脚部の基部にあっては、横位のハケ目調整がなされている。筒部の調整は不明である。

なお、この土壤状遺構の東側は調査区外になっている。

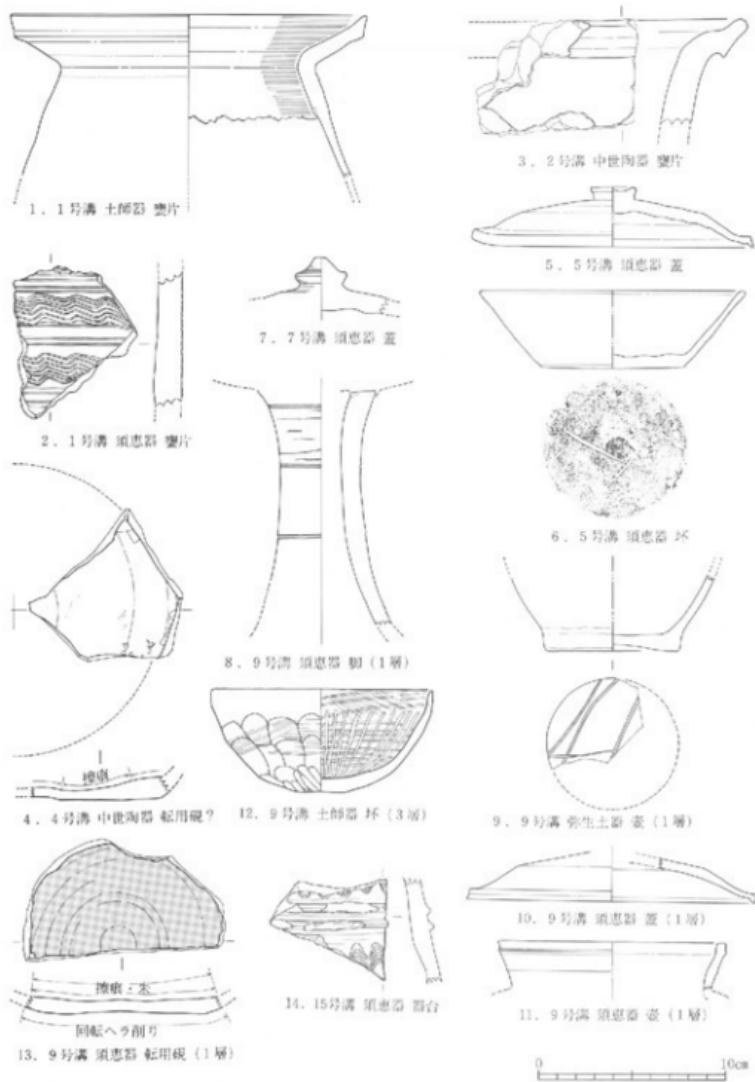


図48 溝出土遺物実測図(2)

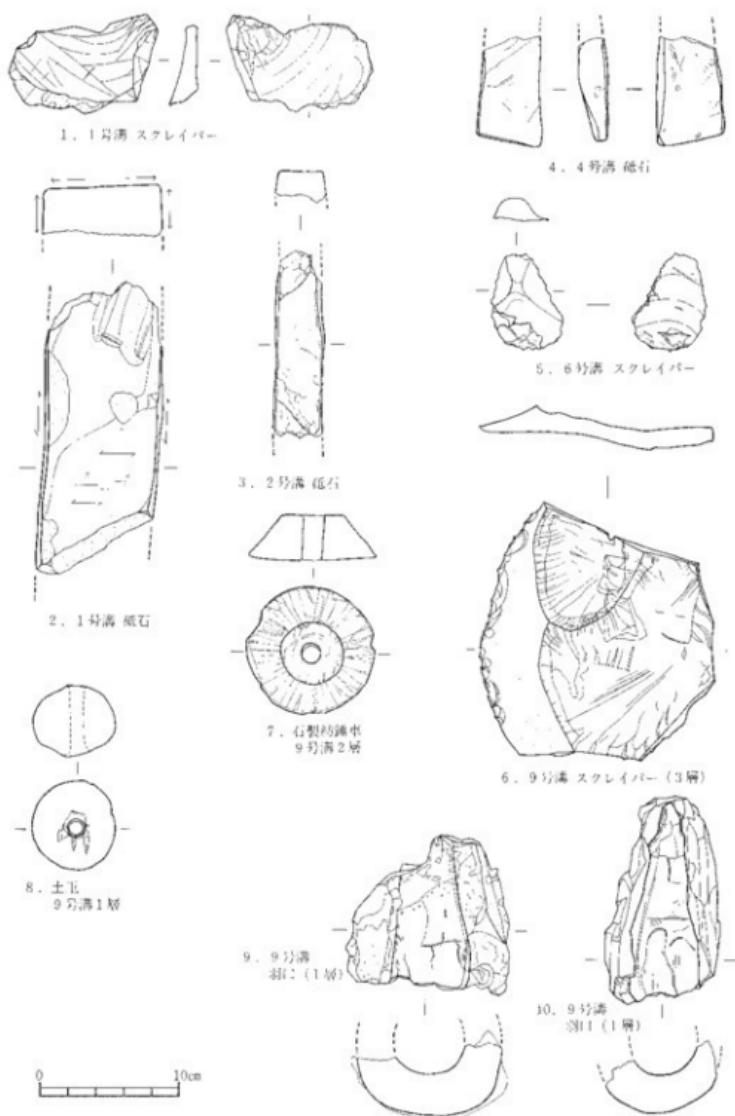


図49 溝出土器遺物実測図(3)

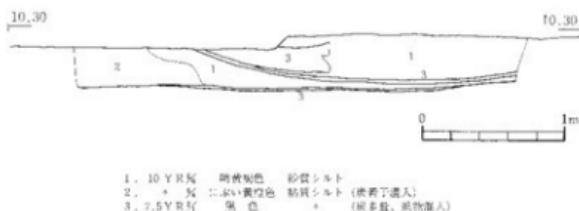


図50 III-2 f 区断面図

## 7.まとめと考察

### (1) 古墳時代の遺構について

古墳時代の住居跡は、第1、3、5、7、16号住居跡の5棟である。その切り合い関係から見ると、第1号が第16号住居跡を、第5号が第7号住居跡を切っているので、これらの間での前後関係は把えられる。次に切り合いとしては把えられないが、第3号と第7号住居跡とは近すぎる所以、同時存在が考えられない。

方位から分類してみると、第3、5、7号住居跡がほぼ同一方向を示し、第1、16号住居跡がそれぞれ異った方向で存在している。ただし、第1号住居跡については、他の住居跡よりも大きめで、幅広い樹溝をもつなど構造の点でも異なり、第3、5、7号住居跡とも近い方向性をもっているので、一世帯の住居と考えないで、共同使用を目的としたものと考えれば、第3、5、7号住居跡のいずれかとの同時存在も考慮できないこともない。

次に出土遺物から見ると、須恵器を出したのが第1号と第16号住居跡、また木米の須恵器の色調は呈していないが第7号住居跡からも出土している。しかしながら、それと共に伴する土器環、壺、高环などを検討してみると、全て「南小泉式」の範囲に入れられるものであり、明確に遺物から区分することはできない。

焼土造構は、第3号住居跡と同様に高环の出土がほとんどであり、炭、灰、焼土が多量に出土し、粘土の存在が確認できている。この粘土については、第3号住居跡南壁寄りからも若干出土しているので、焼土造構と第3号住居跡との同時性が考えられる。また、焼土造構の形態から推察して土師器の窯としての性格も考えられる。

ここで第3号住居跡にもどって、その性格を考えてみたい。この住居跡は、これのみ貼床がなされており、四つの柱穴も確認されている。また、その検出時から焼土、炭、灰が非常に多く、それにともなって多量の高环も出土している。高环は一般の汁器とは異なる性格を有す

る土器と考えられるので、住居跡廃棄後に祭祀がなされたか、焼土遺構同様に土器を焼成したことが考えられる。

III-2「区」にある土壤状遺構は、前記した焼土遺構などと異なり、炭だけの混入と把えてもさしつかえないので、そこから出土した遺物類は、祭祀のためか、投棄されたものと考えられる。

溝のうち、古墳時代のものは第2次調査区北側に東西方向に存在する第9号溝である。今までふれてきた住居跡などの遺構は、この第9号溝を境として、北側に全て位置しており、南側には存在していない。

## (2) 平安時代の遺構について

住居跡といえば、第4号、6号、8号～15号住居跡がこれにあたる。溝は、第10号～14号溝がこれにあたると思われる。また第5号土壤も平安時代の遺構である。

住居跡でその切り合いを見れば、第9号住居跡を第15号住居跡が、第11号住居跡を第15号住居跡が切っている。また、はっきりしないが第10号住居跡を第11号住居跡が切っているようである。ここからは、第10号住居跡→第11号住居跡、第9号住居跡→第15号住居跡という関係と、第9号、第10号住居跡→第11号住居跡→第15号住居跡という関係が考えられる。

切り合いのない住居跡間で考えてみれば、第9号と第10号住居跡、第10号と第12号住居跡とは接近しているので、同時存在を考えるのはむずかしい。

次に形態を見てみると、第8号住居跡にはカマドがない。これについては、第13号、第15号住居跡にも発見されていないが、第15号住居跡が西壁が、第13号住居跡にあっては、北、西壁の一部、東、南壁の全部が調査区外になっているので不明である。

住居跡の方向について分けてみると、第8、11、13、15号住居跡が同一方向で、第9、10、12号住居跡が若干方向を異にするが同一方向と言える。また、第1次調査区にある第6、第14号住居跡は同一方向である。

次に溝との関係をみると、第10、11、13、14号溝はそれぞれ切り合い関係ではなく、それぞれ平行、直行の関係にあり、同時に存在したものと考えられる。第12号溝については方向性は同一であるが、非常に浅く、遺物もなく、その在り方からして、溝状ではあるが、溝としての把え方に疑問がある。

溝は第9号～第12号住居跡を切っており、それらよりも新しい時期が考えられる。また、第13号住居跡に切られており、それよりも若干古い時期を設定できる。

ところで溝の配置を図面(図24)で見てわかるように、第10号、13号、14号溝の間は、道路(通路)とその側溝というような関係にあることがわかる。

このように見えてくると、第2次調査区内の遺構は、一つの地域的まとまりの中にあるが、若

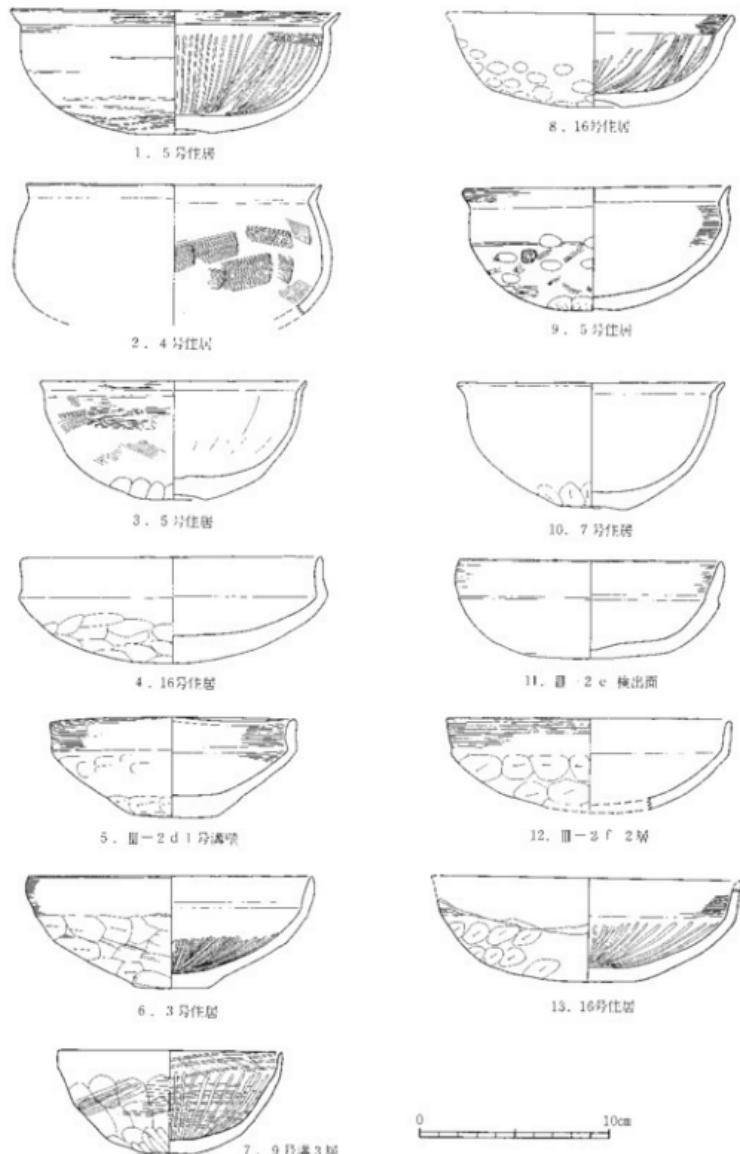


図51 古墳時代 土師器・壺

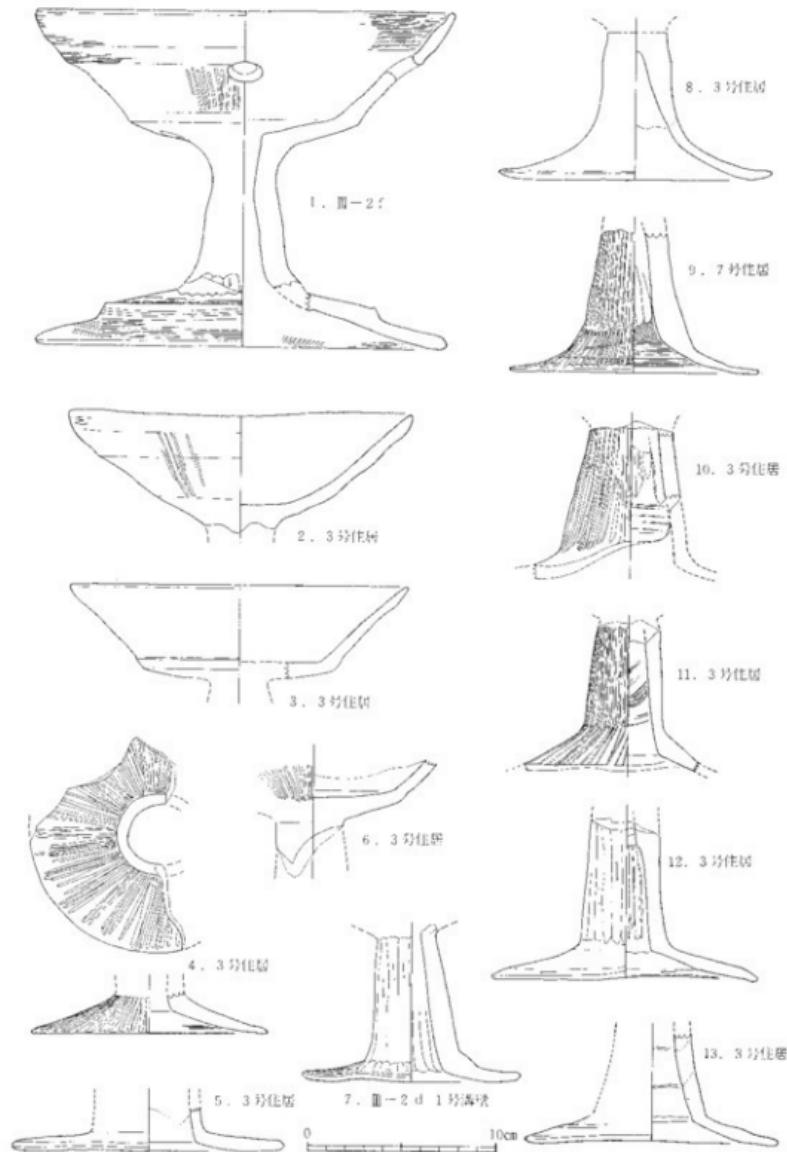


図52 古墳時代 土師器器台・高环

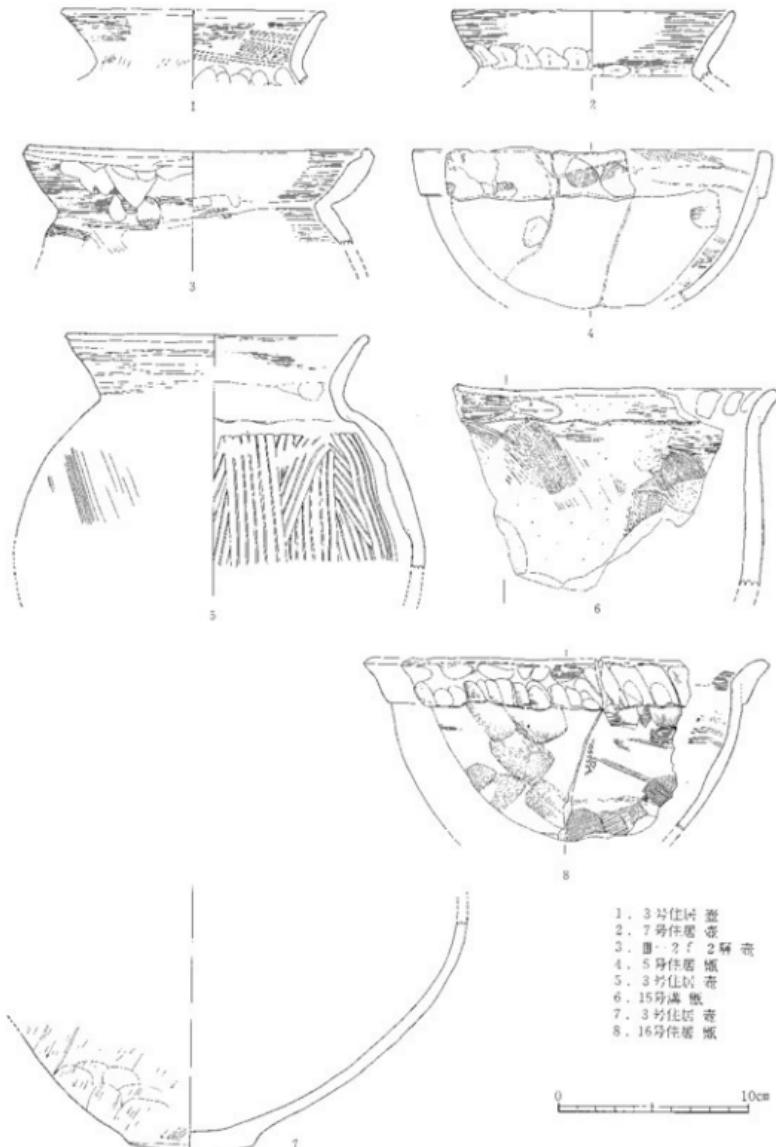


圖53 古墳時代 土師器壺・甌

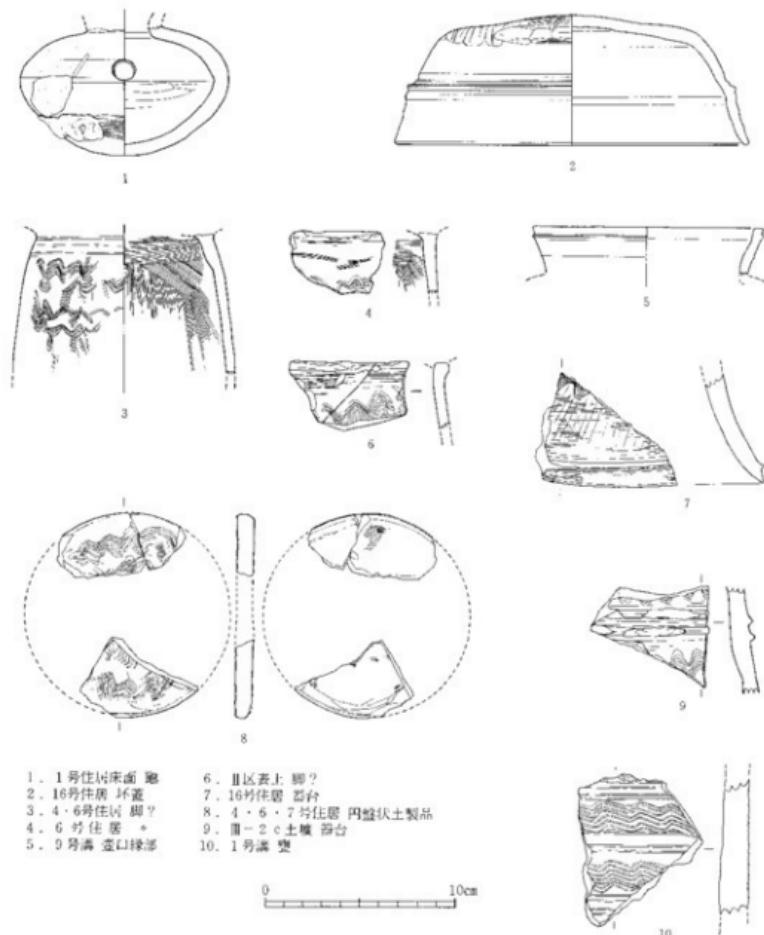


図54 古墳時代 須恵器

半の時期の開きによりグルーピングできるものと思われるが、今まで述べたことや、出土遺物からも、切り合い関係で見た以上の細分は困難である。

### (3) 古墳時代の須恵器について

第1号住居跡床面から出土した躰がある。仙台市東仙台にある大蓮寺窯跡から出土した躰には、沈線のあるものとないものがあるが、ないものに相当するようである。孔の位置が若干高いようである。床面からの上師器は小破片ではっきりした器形は知らないが、第1号住居跡を検出した面からは、南小泉式の土師器の高环が出土している。大蓮寺窯跡が5世紀後半とされているので、また南小泉式の土師器が5世紀中～後とされているので、同時期の遺物と考えられる。このうち第16号住居跡を切っていることもあり、5世紀後半末葉に考えておきたい。

5世紀躰の住居跡からの出土例は少なく、岩手県の今泉遺跡、福島県の下人ノ内遺跡で各1点、今回の南小泉遺跡からの出土が3番目の発見例と言ってよい。出土状況ははっきりしないが、5世紀躰の出土したところは、南小泉遺跡で過去に1点、福島県の稻荷塚古墳のほか、山形県河北町西里、山形市七浦、宮城県栗原郡栗館町宮野油田、福島県いわき市久保ノ作古墳などがある。

この例樽形躰の東北地方での出土例も追記しておくが、福島県稻荷塚古墳、宮城県仙台市の南小泉遺跡、裏町古墳、金山窯跡の4例である。

环蓋は第16号住居跡内土壙出土である。第1号住居跡に切られているので、5世紀後半のものであり、第1号住居跡出土の躰よりは若干先行する時期のものであろう。南小泉遺跡からは出土状況がわからないが、過去に1点出土している。

また第16号住居跡から器台片が出土しているが、時期は环蓋と同期で、5世紀後半中葉と考えられる。器台片が住居跡から出土するのは極めて珍らしい。

その他、土師器のような色調を呈するものが出土したことを紹介した。脚とした円筒状のものと、円盤状土製品としたものである。円盤状土製品については、その裏面周縁端部に離れたような痕跡が若干観察できるので、樽形躰の側面の円盤部かとも思われるが、はっきりしたことは不明である。両方の遺物には、いずれも柳状工具で施文されたと思われる波文が、二重に配列されている。

#### (4) 土師器について

古墳時代の土師器についてみると、第3、第5、第7、第16号住居跡出土のものがまとまつていて資料となり得るものと思う。高环は、いずれも脚部に円孔をもたない南小泉式のものであり、よって、これと共に伴する环、壺、瓶類も南小泉式として把えられる。环をみてみると、從来、塙釜式、南小泉式、引田式と言われているタイプと類似するものが混在しているようで、环をもって、三者の違いを明確にすることはむずかしいように思える。

平安時代の土器を土師器環でみてみると、ほとんどが回転糸切り底の未調整のもので、表杉ノ入式のものである。

また土師器壺、甕類をていねいに観察していると、外面に格子叩き痕、平行叩き痕や、内面に青海波文痕を残すものもあり、須恵器技法の転用が見られる。他例をあげれば、福島県の谷地前C遺跡第31号住居跡出土の甕は平安時代初期のものと思われているものであるが、その表面に格子叩き目がみられる。土師器とは異なるが、埼玉県の末野窯跡、馬橋の内廐寺から青海波文の当其痕のある平瓦が発見されているのも、類似例とすることができるよう。

#### (5) Pit 127出土の中国錢について

第1次調査区Ⅲ-1区を中心としてピットが集中しており、その数は註記したものを数えると181になる。中国古錢を出土したピット127はⅢ-1「区」にあり、35×25cmで、埋土が10YR 5%暗褐色シルトの掘り方の中に、12×14cm、深さ30cm、埋土が炭泥りで10Y R 5%黒褐色粘質シルトの柱痕状の小ピットがあるものである。

このピットを掘り上げる段階でまず出土したのは砾石（図60-4）で、その下から50枚の中國錢（図56、57、58）が出土した。出土状況を見ると、埋土中にはばらばらに入っていたものではなく、互いに重なり合う状況を呈しており、またサビついで付着しているものもあり、50枚が布袋などに入れられて、ヒモでくくられていたものと観察された。

中國錢の種類は、開元通宝、至道元宝、祥符通宝、天禧通宝、天聖元宝、景祐元宝、皇宋通宝、至和通宝、嘉祐元宝、熙寧元宝、元豐通宝、元祐通宝、聖宋元宝、大觀通宝、政和通宝、紹熙元宝、洪武通宝、永樂通宝の18種類で北宋錢が一番多い。

中世の地頭は領主たる尚をもつと同時に地主たる性格をも有していたといわれ、公印の年貢は留守総領を通じて幕府に進上していた。地頭が所領の公事年貢を錢で幕府に進上していることは、当地方に於いても貨幣経済がかなり発展してきたことを示すもので、大いに注目を惹く事柄である。この錢はいうまでもなく宋錢で、鎌倉時代には諸国に流通し、中期頃から遠隔地の年貢は概ね錢納になった。

また、新田開発で所領の拡大がなされると、農業余剰生産物がかなり増大したことが察せられ、定期市場も発達してくる。定期市場の発達と共に、貨幣経済もまた発展したことは疑

写真35  
pit群掘上げ状況



写真36  
pit127の状況



いない。鎌倉中期から地頭等の幕府に提出公事年貢が銭納になっていることは地方市場に於いて既に貨幣が流通していたことを間接的に物語るものである。即ち、各地の地頭等は余剰貢納物を市場に提出して貨幣に代えていたことであろうし、市場在家に課した税も貨幣であったろう。この貨幣は宋錢が主なものであるが、これがこの地方にも流通し、地頭が市場を支配してこれを吸収していたものと考えられている。(1950:佐々木慶一)

III-1区を中心として多数認められるピットは、中世（あるいは近世）の掘立柱建物跡を構成するものと思うが、その組み合わせは不明である。これら建物の一角にピット127があり、蓄銭の場所として選定されたものであろう。

仙台市内の中世遺跡である安久東遺跡、湊ノ巣遺跡、今泉城跡の調査によつても、古銭の発見はあるが、本報告のように、一土城、一ピットからの集中出土例はない。しかしながら、県

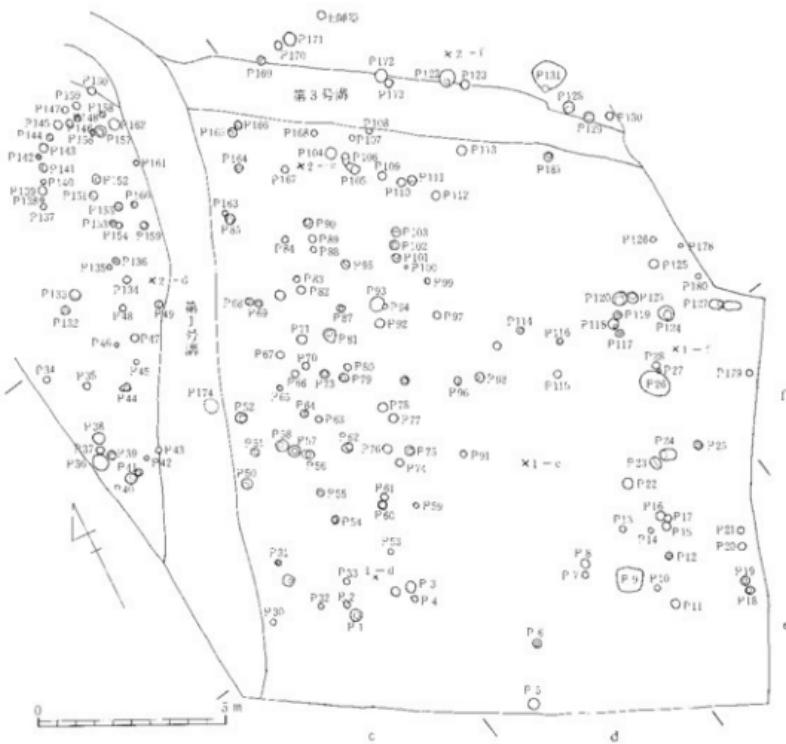


図55 第1次調査区ピット群

表1 ピット群註記表

No.	掘 方	土 色・質	柱 棟	上 色・質	深さ
1	42×36	10YR 4/2 黄褐色シルト	25×16	10YR 4/2 黄褐色シルト	15
2	25×19	。	13×13	10YR 4/2 黄褐色シルト	10
3	18×14	10YR 4/2 鈍い黄褐色シルト	なし		10
4	29×26	10YR 4/2 褐色シルト	なし		18
5	31×26	7.5YR 4/2 黑褐色シルト	なし		33
6	29×22	7.5YR 4/2 褐色シルト	15×12	7.5YR 4/2 黑褐色シルト	30
7	24×20	10YR 4/2 鈍い黄褐色シルト	12×9	10YR 4/2 鈍い黄褐色シルト	13
8	24×22	10YR 4/2 暗褐色シルト	なし		46
9	66×75	10YR 4/2 暗褐色シルト	なし		27

No.	掘 方	上 色・質	柱 痕	土 色・質	深 き
10	28×16	10Y R %暗褐色シルト	なし		37
11	26×21	10Y R %暗褐色シルト	なし		52
12	21×22	暗褐色シルト	17×11	10Y R %黒褐色シルト	37
13	17×17	7.5Y R %褐色シルト	なし		6
14	24×20	タ	なし		4
15	29×22	10Y R %褐色シルト	14×13	10Y R %黒褐色シルト	42
16	26×25	7.5Y R %褐色シルト	12×10	10Y R %黒褐色シルト	18
17	21×18	7.5Y R %褐色シルト	なし		30
18	26×23	10Y R %暗褐色シルト	16×13	7.5Y R %黒褐色シルト	31
19	28×28	7.5Y R %明褐色シルト	18×18	7.5Y R %灰褐色シルト	7
20	22×18	10Y R %暗褐色シルト	なし		20
21	23×18	10Y R %暗褐色シルト	なし		22
22	32×30	7.5Y R %灰褐色シルト	なし		7
23	38×27	10Y R %暗褐色シルト	33×15	10Y R %暗褐色シルト	15
24	48×33	10Y R %純い黄褐色シルト	29×23	10Y R %暗褐色シルト	23
25	22×21	10Y R %純い黄褐色シルト	14×15	10Y R %黒褐色シルト	46
26	90×65	10Y R %純い黄橙色シルト	なし		4
27	12×10	10Y R %黒褐色シルト	なし		13
28	20×16	10Y R %褐色シルト	なし		15
29	48×28	10Y R %灰黄褐色シルト	なし		35
30	17×13	10Y R %暗褐色シルト	なし		5
31	20×16	10Y R %明黄褐色シルト	12×10	10Y R %褐色シルト	11
32	19×18	10Y R %黄褐色シルト	なし		5
33	20×18	10Y R %灰黄褐色シルト	なし		15
34	20×18	10Y R %純い黄褐色シルト	なし		18
35	20×20	10Y R %純い黄褐色シルト	18×12	10Y R %暗褐色シルト	20
36	30×30	10Y R %純い黄橙色砂質シルト	なし		5
37	25×21	10Y R %暗褐色シルト	なし		22
38	31×30	10Y R %純い黄橙色砂質シルト	なし		8
39	30×22	10Y R %褐色砂質シルト	17×20	10Y R %純い黄褐色シルト	20
40	36×28	10Y R %純い黄橙色砂質シルト	14×12	10Y R %褐色シルト	25
41	30×22	10Y R %純い黄橙色砂質シルト	13×12	10Y R %褐色シルト	16
42	20×16	10Y R %純い黄褐色砂質シルト	10×10	10Y R %灰黄褐色シルト	5
43	20×17	10Y R %純い黄褐色砂質シルト	12×10	10Y R %黒色シルト	33
44	30×16	10Y R %純い黄褐色砂質シルト	11×11	10Y R %褐色シルト	18
45	15×16	10Y R %褐色シルト	なし		16
46	16×13	10Y R %暗褐色シルト	なし		5
47	22×16	10Y R %純い黄褐色シルト	なし		23
48	16×14	10Y R %灰褐色シルト	なし		16
49	21×18	10Y R %純い黄橙色シルト	16×10	10Y R %灰黄褐色シルト	18

No.	掘方	土色・質	柱積	土色・質	深さ
50	30×26	10Y R 4/6純い黄褐色砂質シルト	15×13	10Y R 4/6純い黄褐色砂質シルト	8
51	21×21	10Y R 4/6暗褐色シルト	12×11	10Y R 4/6暗褐色シルト	24
52	30×28	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	15×15	10Y R 4/6褐色シルト	22
53	15×15	10Y R 4/6黒褐色シルト	なし		4
54	25×22	10Y R 4/6黒褐色シルト	15×15	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	10
55	20×20	タ	11×11	10Y R 4/6黒褐色シルト	11
56	24×25	タ	28×22	10Y R 4/6黒褐色シルト	22
57	30×31	10Y R 4/6暗褐色シルト	14×15	10Y R 4/6黒褐色シルト	19
58	31×29	10Y R 4/6黒褐色シルト	14×12	10Y R 4/6褐色シルト	24
59	16×13	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	なし		2
60	20×21	タ	19×15	10Y R 4/6灰黄褐色シルト	25
61	18×16	10Y R 4/6黒褐色シルト	なし		14
62	37×26	タ	20×20	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	18
63	17×16	10Y R 4/6黒色シルト	なし		7
64	20×18	10Y R 4/6褐色シルト	15×10	10Y R 4/6褐色シルト	23
65	13×14	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	なし		28
66	20×21	10Y R 4/6褐色シルト	16×12	10Y R 4/6黒褐色シルト	10
67	20×20	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	なし		1.5
68	20×17	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	11×11	10Y R 4/6黒褐色シルト	31
69	22×20	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	13×14	10Y R 4/6黒褐色シルト	22
70	20×18	10Y R 4/6黒褐色シルト	なし		17
71	28×20	10Y R 4/6褐色シルト	なし		4
72	29×26	10Y R 4/6暗褐色シルト	なし		32
73	26×23	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	15×13	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	7
74	22×19	10Y R 4/6暗褐色シルト	14×12	10Y R 4/6黄褐色シルト	14
75	28×25	10Y R 4/6褐色シルト	14×14	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	15
76	23×21	10Y R 4/6黒褐色シルト	17×15	10Y R 4/6黒褐色シルト	19
77	28×34	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	なし		1
78	22×21	10Y R 4/6黒褐色シルト	なし		14
79	23×22	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	10×10	10Y R 4/6黒褐色シルト	16
80	16×15	10Y R 4/6黒褐色シルト	なし		10
81	39×32	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	16×13	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	9
82	20×22	10Y R 4/6暗褐色シルト	なし		8
83	19×16	10Y R 4/6暗褐色シルト	なし		11
84	20×16	10Y R 4/6暗褐色シルト	なし		3
85	27×24	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	22×13	10Y R 4/6黒褐色シルト	16
86	28×24	10Y R 4/6純い黄褐色シルト	16×15	10Y R 4/6灰黄褐色シルト	47
87	27×23	10Y R 4/6褐色シルト	14×11	10Y R 4/6黒褐色シルト	22
88	20×17	タ	なし		15
89	20×17	10Y R 4/6黒褐色シルト	なし		18

No.	掘方	土色・質	柱痕	土色・質	深さ
90	22×22	10Y R %黒褐色シルト	13×12	10Y R %鈍い黄褐色シルト	19
91	18×10	10Y R %褐灰色シルト	なし		34
92	20×14	10Y R %褐色シルト	なし		26
93	41×38	タ	なし		19
94	14×13	10Y R %黒褐色シルト	なし		15
95	22×19	10Y R %褐色シルト	19×12	10Y R %暗褐色シルト	18
96	19×19	10Y R %暗褐色シルト	10×10	10Y R %鈍い黄褐色シルト	20
97	18×16	10Y R %鈍い黄褐色シルト	なし		1
98	25×21	10Y R %鈍い黄褐色シルト	10×10	10Y R %暗褐色シルト	23
99	18×15	10Y R %褐色シルト	なし		1
100	11×10	10Y R %暗褐色シルト			5
101	21×19	10Y R %暗褐色シルト	11×10	10Y R %鈍い黄褐色シルト	19
102	20×19	10Y R %鈍い黄褐色シルト	12×12	10Y R %暗褐色シルト	19
103	20×20	10Y R %黒褐色シルト	19×10	10Y R %褐色シルト	37
104	29×27	10Y R %鈍い黄褐色シルト	なし		15
105	32×28	10Y R %褐色シルト	28×19	10Y R %暗褐色シルト	17
106	35×18	タ	17×15	10Y R %鈍い黄褐色シルト	10
107	16×11	10Y R %鈍い黄褐色シルト	なし		3
108	20×18	10Y R %褐色シルト	なし		6
109	22×19	10Y R %暗褐色シルト	なし		14
110	24×20	タ	なし		20
111	24×20	10Y R %暗褐色シルト	10×9	10Y R %黒褐色シルト	26
112	27×21	10Y R %暗褐色シルト	なし		34
113	29×23	10Y R %褐色シルト	なし		33
114	20×16	10Y R %暗褐色シルト	13×11	10Y R %黒褐色シルト	20
115	18×18	10Y R %黒褐色シルト	なし		37
116	19×17	10Y R %暗褐色シルト	12×12	10Y R %黒褐色シルト	10
117	21×17	10Y R %褐色シルト	10×10	10Y R %灰黄褐色シルト	5
118	23×24	タ	7×8	10Y R %黒褐色シルト	5
119	20×16	10Y R %褐色シルト	9×8	10Y R %灰黄褐色シルト	4
120	38×29	10Y R %暗褐色シルト	16×14	10Y R %暗褐色シルト	25
121	23×24	10Y R %暗褐色シルト	16×14	10Y R %暗褐色シルト	21
122	43×39	10Y R %鈍い黄褐色シルト	16×14	10Y R %暗褐色シルト	38
123	26×19	タ	なし		30
124	47×35	10Y R %暗褐色シルト	26×22	10Y R %鈍い黄褐色シルト	34
125	22×20	10Y R %暗褐色シルト	なし		3
126	15×15	タ	なし		21
127	35×25	10Y R %暗褐色シルト	12×14	10Y R %黒褐色粘質シルト(液性)	30
128	26×24	タ	18×13	タ	15
129	28×28	10Y R %暗褐色シルト	19×11	10Y R %暗褐色シルト	20

No.	掘方	土色・質	柱痕	土色・質	深さ
130	22×20	7.5Y R %褐色シルト	なし		15
131	106×77	10YR %、10YR %、%、%、%	なし		28
132	24×25	10Y R %暗褐色シルト	20×15	10Y R %黒褐色シルト	20
133	25×25	10Y R %純い黄褐色砂質シルト	18×20	10Y R %黒褐色シルト	25
134	16×16	10Y R %黒褐色シルト	なし		10
135	15×15	10Y R %純い黄褐色シルト	なし		10
136	22×22	10Y R %黒褐色シルト	8×7	10Y R %褐色シルト	25
137	23×18	10Y R %褐色砂質シルト	15×13	10Y R %黒褐色シルト	20
138	11×11	10Y R %黒褐色シルト	なし		11
139	24×26	10Y R %褐色シルト	なし		1
140	10×11	7.5Y R %灰褐色シルト	なし		1
141	27×20	10Y R %純い黄褐色砂質シルト	18×14	10Y R %暗褐色シルト	16
142	15×15	10Y R %褐色砂質シルト	9×9	10Y R %純い黄褐色シルト	7
143	25×25	タ	13×13	10Y R %純い黄褐色砂質シルト	11
144	16×14	タ	11×10	10Y R %黒褐色シルト	18
145	24×20	10Y R %暗褐色シルト	なし		3
146	20×28	10Y R %暗褐色シルト質砂	なし		3
147	17×15	10Y R %暗褐色シルト	なし		12
148	19×17	タ	11×10	10Y R %黒褐色シルト	20
149	20×19	10Y R %黒褐色シルト	なし		24
150	20×18	10Y R %褐色シルト	なし		4
151	20×17	10Y R %褐色砂質シルト	12×12	10Y R %暗褐色シルト	14
152	24×18	タ	10×10	タ	13
153	19×18	10Y R %純い黄褐色シルト	10×10	10Y R %黒褐色シルト	16
154	13×11	10Y R %純い黄褐色シルト	なし		22
155	19×19	10Y R %褐色砂質シルト	16×9	10Y R %黒褐色シルト	21
156	15×16	10Y R %純い黄褐色砂質シルト	12×9	タ	13
157	29×26	タ	16×13	タ	22
158	18×15	10Y R %明黄褐色砂質シルト	10×10	10Y R %暗褐色シルト	14
159	20×18	10Y R %純い黄褐色砂質シルト	14×14	10Y R %灰黄褐色シルト	12
160	15×14	タ	13×9	10Y R %黒褐色シルト	28
161	15×14	10Y R %灰黄褐色シルト	なし		16
162	28×22	10Y R %純い黄褐色シルト	なし		15
163	12×12	10Y R %黒褐色シルト	なし		12
164	26×20	10Y R %黒褐色シルト	11×11	10Y R %黒褐色シルト	28
165	25×23	10Y R %純い黄褐色シルト	15×13	10Y R %黒褐色シルト	23
166	25×15	10Y R %褐色シルト	15×12	タ	28
167	20×20	10Y R %純い黄褐色シルト	なし		21
168	23×16	10Y R %黒褐色シルト	なし		16
169	25×28	10Y R %純い黄褐色シルト	22×19	10Y R %黒褐色シルト	30

No.	掘方	上色・質	柱痕	土色・質	深さ
170	22×20	10Y R %鈍い黄褐色シルト	なし		8
171	26×25	10Y R %鈍い黄褐色シルト	なし		10
172	36×32	10Y R %黒褐色シルト	なし		4
173	22×20	タ	なし		31
174	(痕跡のみ)				
175	25×23	10Y R %褐色シルト質砂	10×10	10Y R %黒褐色シルト	10
176	18×16	10Y R %黒褐色シルト	なし		11
177	15×14	10Y R %黒褐色シルト	なし		23
178	13×13	10Y R %暗褐色シルト	なし		8
179	18×17	10Y R %黒褐色シルト	なし		19
180	16×16	10Y R %暗褐色シルト	なし		7
181	22×20	10Y R %黒褐色シルト	14×14	10Y R %灰黄褐色シルト	43

表2 中近世陶磁器の出土状況

種別	出土地点	層	出土点数	種別	出土地点	層	出土点数
陶器	第1号溝	埋1層	8	磁器	第1号溝	埋1層	1
タ	第2号溝	埋1層	2	タ	第5号溝	埋1層	1
タ	第5号溝	埋1層	5	タ	第6住居跡	埋1層	1
タ	第6号溝	埋1層	6	タ	第1号土壙	埋1層	1
タ	第10号溝	埋1層	1	タ	II区	2層	3
タ	第15号溝	埋1層	6	タ	II-3c区	2層	1
タ	焼土遺構	埋1層	1	タ	II-3f区	1層	1
タ	第3号土壙	埋2層	1				
タ	II区	表採	3				
タ	II区	1層	4				
タ	II-3f区	1層	3				
タ	II区	2層	2				
タ	III区	表採	1				
タ	III区	1層	2				
タ	III-2c区	2層	1				
タ	III-2d区	2層	2				
タ	III-3d区	2層	4				
タ	III-1c区	2層	2				
タ	III-2e区	1層	1				
タ	III-3e区	1層	2				
タ	III-2f区	2層	2				

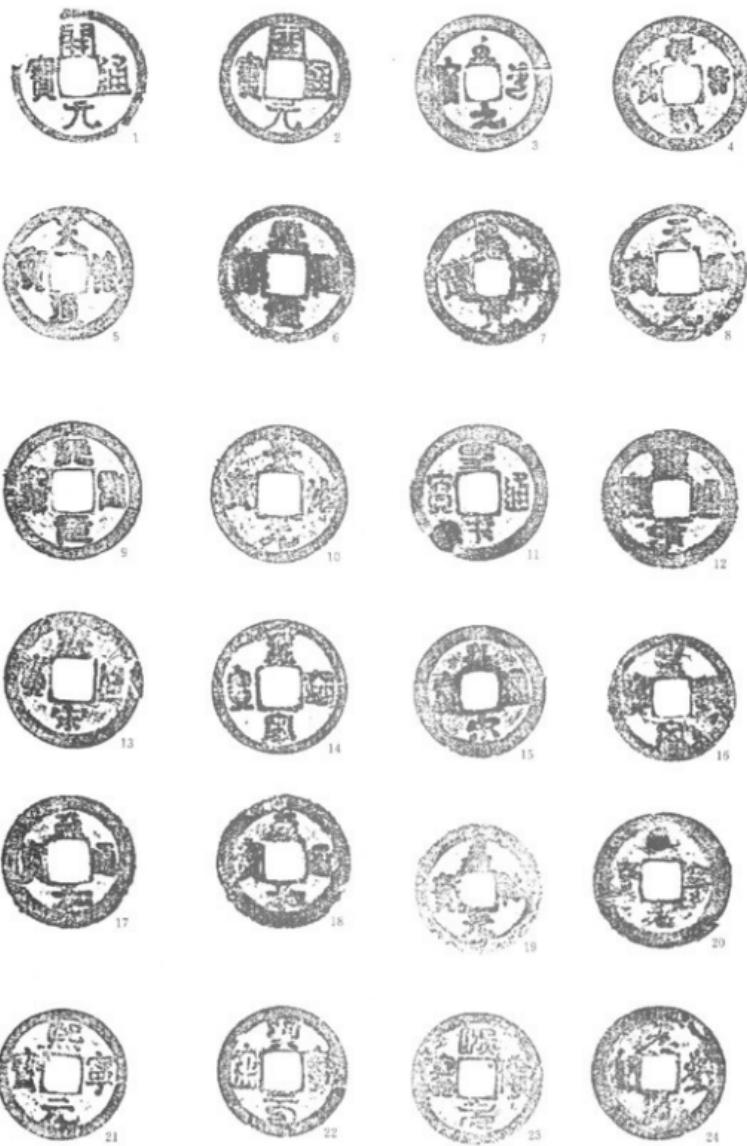


图56 古钱拓影(1)

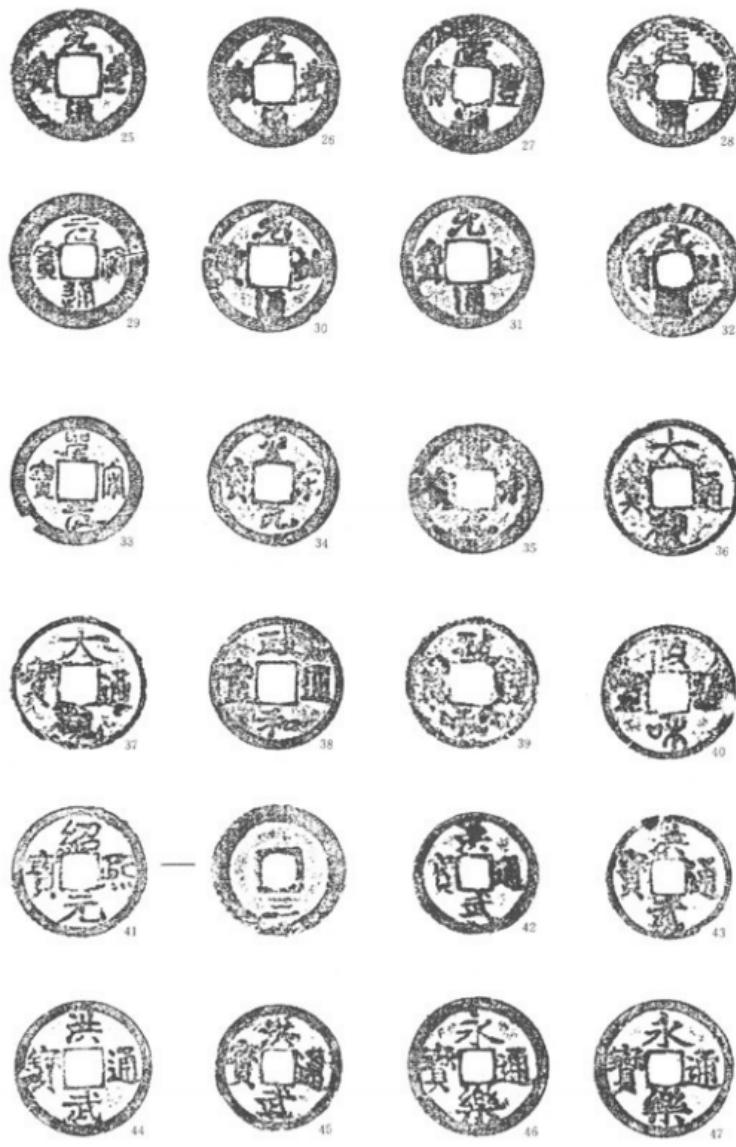


圖57 古錢拓影(2)



图58 古钱拓影(3)

表3 中 国 古 钱 記 記 表

編	種類	時代	初鑄年	書体	直徑mm	編	種類	時代	初鑄年	書体	直徑mm
1	開元通寶	唐	621	真書	2.3	26	元豐通寶	北宋	1078	真書	2.3
2	開元通寶	唐	621	真書	2.3	27	元豐通寶	北宋	1078	篆書	2.5
3	至道元宝	北宋	995	草書	2.4	28	元祐通寶	北宋	1078	篆書	2.3
4	祥符通寶	北宋	1009	真書	2.4	29	元祐通寶	北宋	1086	篆書	2.4
5	天禧通寶	北宋	1017	真書	2.3	30	元祐通寶	北宋	1086	真書	2.3
6	天聖元宝	北宋	1023	篆書	2.4	31	元祐通寶	北宋	1086	真書	2.3
7	天聖元宝	北宋	1023	真書	2.4	32	元祐通寶	北宋	1086	真書	2.3
8	天聖元宝	北宋	1023	真書	2.4	33	聖宋元宝	北宋	1101	篆書	2.3
9	天聖元宝	北宋	1023	篆書	2.4	34	聖宋元宝	北宋	1101	真書	2.3
10	景德元宝	北宋	1034	真書	2.5	35	聖宋元宝	北宋	1101	真書	2.3
11	皇宋通寶	北宋	1039	真書	2.4	36	大觀通寶	北宋	1107	真書	2.4
12	皇宋通寶	北宋	1039	真書	2.4	37	大觀通寶	北宋	1107	真書	2.4
13	皇宋通寶	北宋	1039	真書	2.4	38	政和通寶	北宋	1111	真書	2.4
14	皇宋通寶	北宋	1039	篆書	2.4	39	政和通寶	北宋	1111	篆書	2.3
15	皇宋通寶	北宋	1039	真書	2.4	40	政和通寶	北宋	1111	篆書	2.4
16	皇宋通寶	北宋	1039	篆書	2.3	41	紹熙元宝	南宋	1190	真書	2.3
17	至和通寶	北宋	1054	真書	2.3	42	洪武通寶	明	1368	真書	2.2
18	至和通寶	北宋	1054	真書	2.3	43	洪武通寶	明	1368	真書	2.2
19	嘉祐元宝	北宋	1056	真書	2.3	44	洪武通寶	明	1368	真書	2.4
20	熙寧元宝	北宋	1068	真書	2.4	45	洪武通寶	明	1368	真書	2.3
21	熙寧元宝	北宋	1068	真書	2.3	46	永樂通寶	明	1408	真書	2.5
22	熙寧元宝	北宋	1068	篆書	2.3	47	永樂通寶	明	1408	真書	2.4
23	熙寧元宝	北宋	1068	篆書	2.3	48	永樂通寶	明	1408	真書	2.4
24	元豐通寶	北宋	1078	真書	2.4	49	永樂通寶	明	1408	真書	2.5
25	元豐通寶	北宋	1078	真書	2.3	50	永樂通寶	明	1408	真書	2.4

内及び他県においては土中に埋蔵する例も多く、この時期の一般集落内における一般的蓄銭方法ととらえてもさしつかえないものと思われる。

もちろん、これには社会的背景や住居形態も大きく影響していると思われるが、それ以前の竪穴住居における物品の貯蔵形態も伝統的に残存しているものと把えられなくもない。

今回調査区の近辺には、結城七郎館、国分氏の館（後に若林城として使用される）が知られ、これら中国銭の出土も、それらとの関連でとらえられるものと思う。藩政期に書かれた封内風土記によると、国分33ヶ村のうちでも小泉邑は最大で、「戸口凡百六十」であり、「古壘凡二。古城。結城館」があり、古城が国分氏の館に当たるものである。

特にとりあげなかったが、中世陶器片は鎌倉、南北朝時代に該当できるものもあり、当然、上述したこととも関連してくるものである。

#### (6) 南小泉遺跡の歴史的復元

南小泉遺跡は、その概要でもふれたが、一般には弥生時代から古墳時代の集落跡として把えられている。しかしながら今回の調査でも明らかになったように、奈良時代も含まれると思われるが、平安時代の遺構が遺跡範囲全般に分布しているようである。これは当地区の北方に陸奥国分寺、同尼寺が存在することとも大いに関連するものと思う。

そこで今までの周辺の発掘調査、分布調査から集落跡の位置する範囲を復元してみると、まず弥生時代の集落は、遠見塚古墳前方部から霞ノ目飛行場西半にかけての地域と考えられる。次に古墳時代の集落は、遠見塚古墳の北側から、南は今回の調査区まで、東はやはり霞ノ目飛行場までの南北に長い地域が考えられる。遠見塚古墳は古墳時代集落の北辺近くに造営されたと考えてさしつかえないものと思われる。それ以降は、条里遺構の残るところも近辺にあり、国分寺等を含む広い範囲が、南小泉遺跡を包み込む、平安時代の遺構が存在する範囲として把えられよう。東についてはバイパス以東が湿地的なので、バイパス及びそれに沿った地域までが考えられる。

中世以降は、若林城（古城）を中心とした地割りがなされ、第1次調査区で発見された溝は、ほとんどが若林城の地割りと平行関係にある。

追記：発掘調査及び報告書作成にあたり、東北歴史資料館の藤沼邦彦氏、仙台育英高等学校の渡辺泰伸氏にご指導をいただいたことに対し、この紙上を借りて感謝の意を表したい。

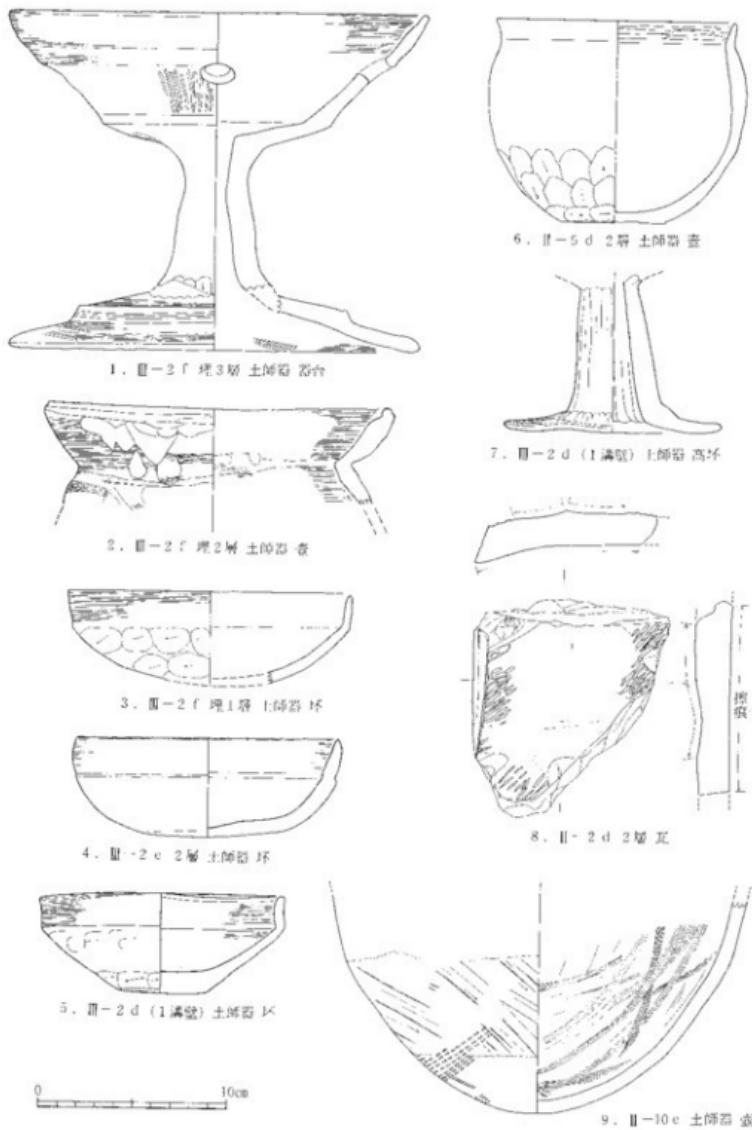


図59 その他の遺物(1)実測図

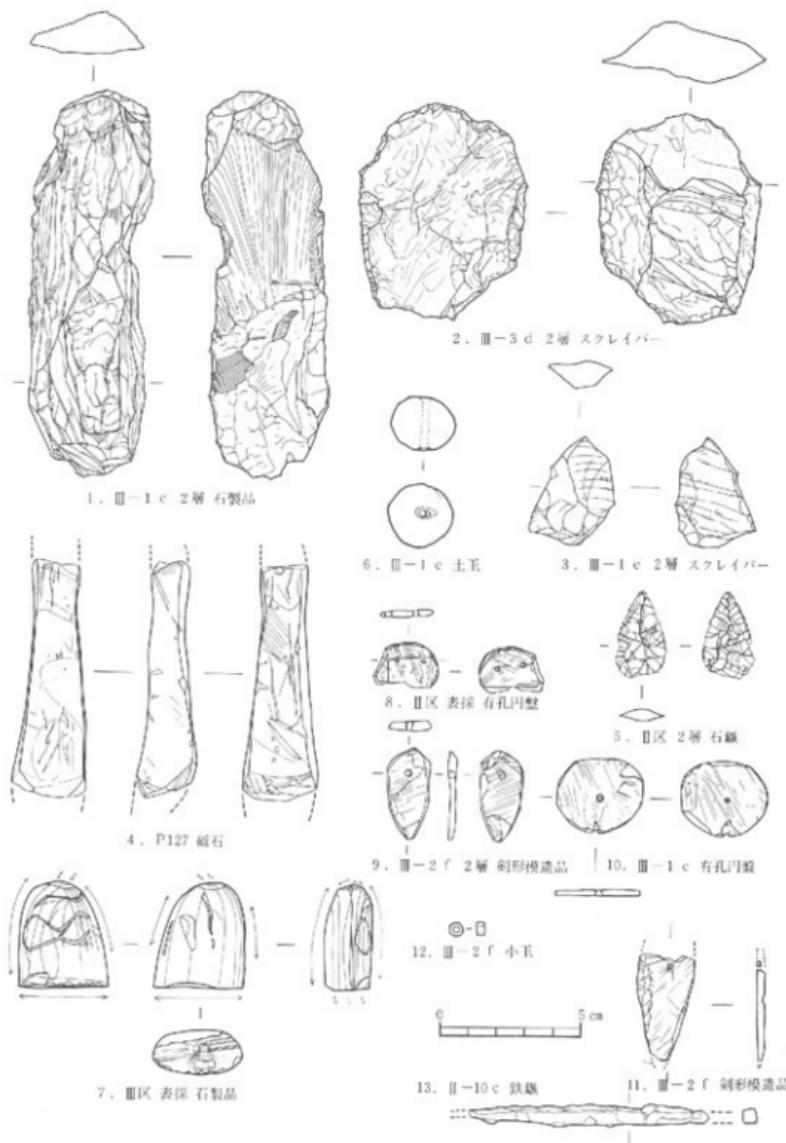
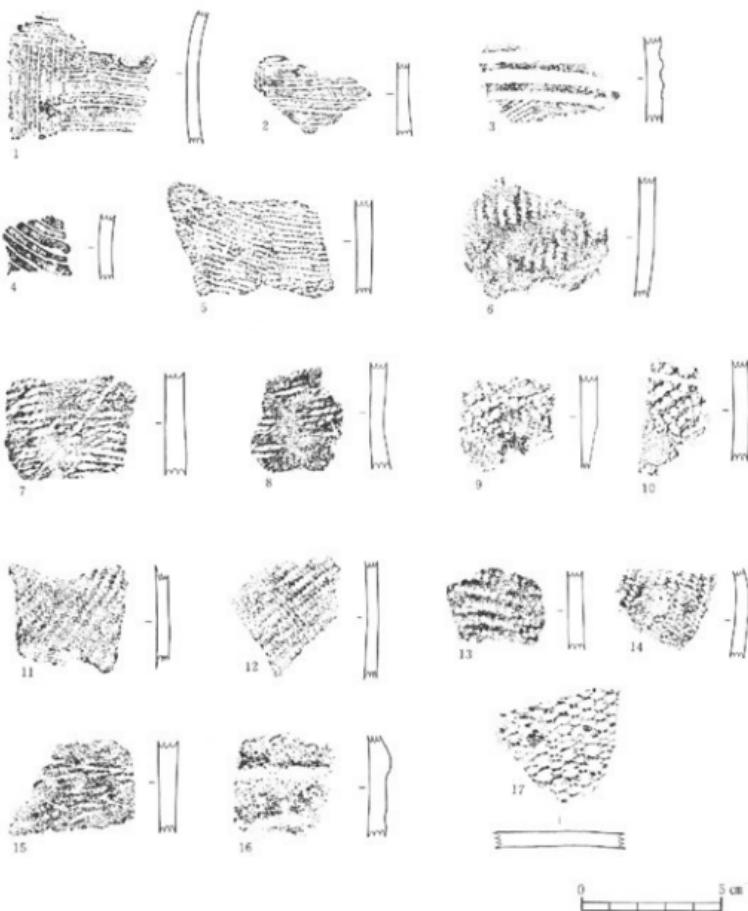


図60 その他の遺物(2)実測図



1. III-1 d 1層  
 2. 第3号住居跡 埋2層  
 3. III-2 c 2層  
 4. 第3号住居跡 埋1層  
 5. III-2 e 2層  
 6. 第9号溝 埋2層  
 7. \* \* 埋1層  
 8. \* \* 埋1層  
 9. II-3 f 1層  
 10. 第11号住居跡 埋2層  
 11. 第9号溝 埋1層  
 12. \* 埋3層  
 13. \* \*  
 14. 第11号住居跡 埋1層  
 15. 第15号溝 埋1層  
 16. 第9号溝 埋1層  
 17. 第6号住居跡 埋1層

図61 弥生土器片拓影

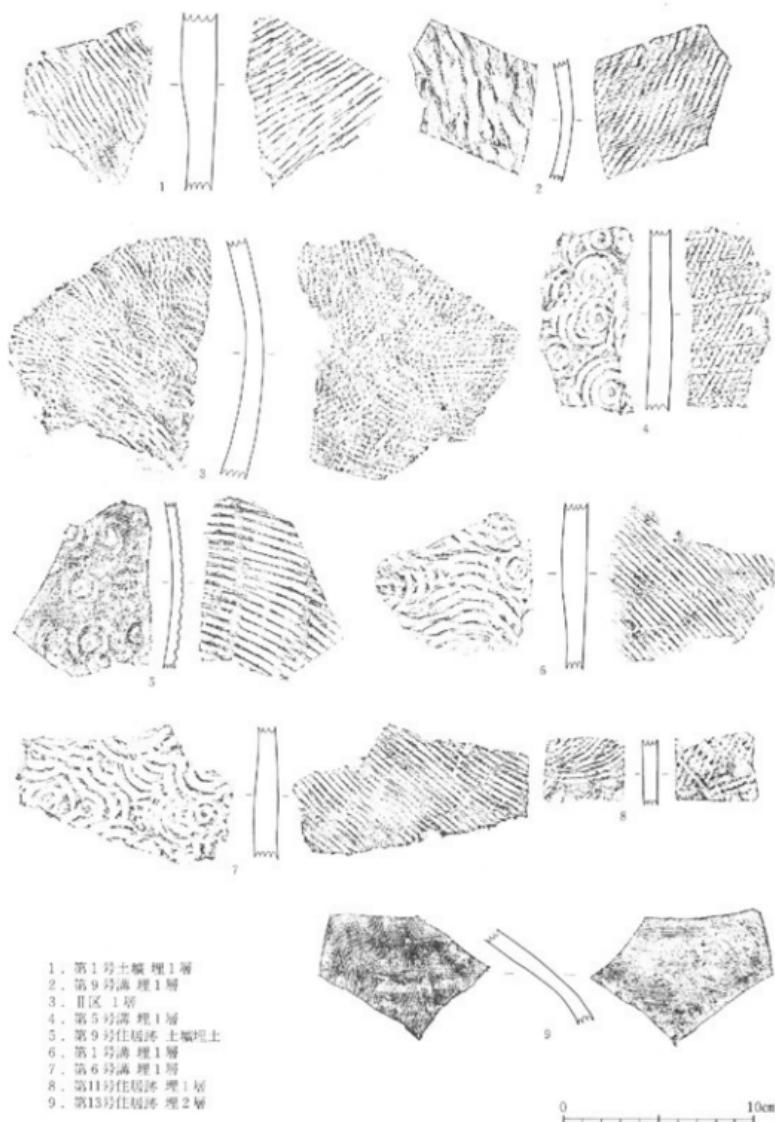


図62 須恵器甕片拓影(1)

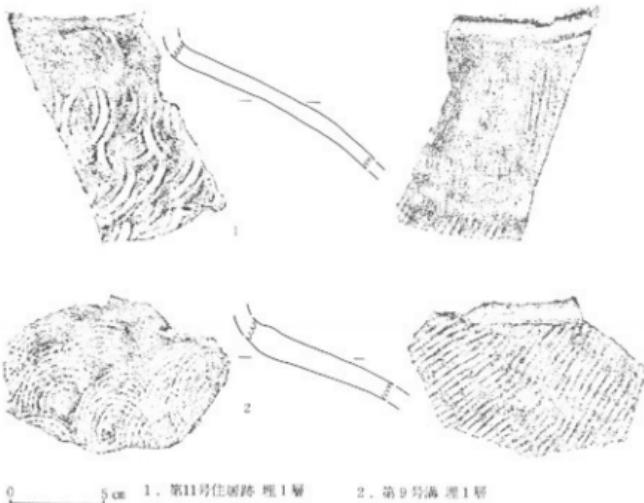


図63 須恵器甕片拓影(2)

#### 引用・参考文献

- 伊東信雄・結城慎一・工藤哲司 「南小泉遺跡一帯範囲確認調査報告書」 仙台市教育委員会 昭和53年3月  
結城慎一・工藤哲司 「史跡遠見塚古墳—昭和53年度環境整備予備調査概報」 仙台市教育委員会 昭和54年3月
- 工藤哲司 「史跡遠見塚古墳—昭和55年度環境整備予備調査概報」 仙台市教育委員会 昭和56年3月  
渡辺泰伸 「東北古墳時代須恵器の様相と編年」「陸奥国官窯跡群」 古窯跡研究会 昭和56年3月
- 中尾 光 「中世東北の経済と文化」「東北の歴史(上巻)」 吉川弘文館 昭和42年9月
- 佐藤裕宏・矢口 熊 「庄内地方出土の古鉄」「庄内考古学(第14号)」 庄内考古学研究会 昭和52年5月
- 永原慶二 「(N H K 大学講座)日本の中世国家」 日本放送出版協会 昭和55年10月
- 伊東信雄 「仙台市内の古代遺跡」「仙台市史 3」 仙台市史編纂委員会 昭和25年8月
- 佐々木慶市 「古代中世の仙台地方」「仙台市史 3」 仙台市史編纂委員会 昭和25年8月
- 中村 浩 「和風陶瓦窯の研究」 柏書房 昭和56年11月
- 奥津春生 「大仙台園の地盤、地下水」 昭和48年1月

## 職 員 錄

		仙台市文化財調査報告書刊行目録
社会教育課		
課長	水野昌一	第1集 天然記念物盆原下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
主幹	早坂春一	第2集 仙台城（昭和42年3月）
文化財管理係		第3集 仙台市燕泥古墳・寺塚穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
係長	鈴木昭三郎	第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
主幹	鈴木高文 (10月1日算入)	第5集 仙台市南小泉法顕塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
主事	山口泰 渡辺洋一	第6集 仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
文化財調査係		第7集 仙台市富沢森町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
係長(兼)	早坂春一	第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
教諭	佐藤隆 渡辺忠彦 佐藤裕裕 加藤正範	第9集 仙台市岸舟町奈津寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
主事	田中則一 結城慎一 成瀬茂	第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
教諭	青沼・民 事務官	第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
主事	柳沢みどり 木村浩二 藤原信彦 佐藤洋 金森安季 佐藤甲二 吉岡恭平 工藤哲司 渡部弘美 主浜光綱 斎野裕彦 長嶋栄一 荒井格	第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
臨時職員	高橋勝也	第13集 南小泉遺跡一範囲認定調査報告書（昭和53年3月）
		第14集 栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
		第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
		第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
		第17集 北星敷遺跡（昭和54年3月）
		第18集 桜江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
		第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
		第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
		第21集 仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和55年3月）
		第22集 経ヶ峯（昭和55年3月）
		第23集 半報1（昭和55年3月）
		第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
		第25集 三神率遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
		第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
		第27集 史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
		第28集 年報2（昭和56年3月）
		第29集 郡山遺跡I-昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
		第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
		第31集 仙台市開発関係遺跡調査報告II（昭和56年3月）
		第32集 沼ノ池遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
		第33集 山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
		第34集 六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
		第35集 南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第1次調査報告 (昭和57年3月)

仙台市文化財調査報告書第35集  
昭和56年度  
南 小 泉 遺 跡  
都市計画街路建設工事関係第1次調査報告  
昭和57年3月  
発行 仙台市教育委員会  
仙台市泉区分町3-7-1  
仙台市教育委員会社会教育課  
印刷 株式会社 東北プリント  
仙台市立町24-24 TE1.63-1166

